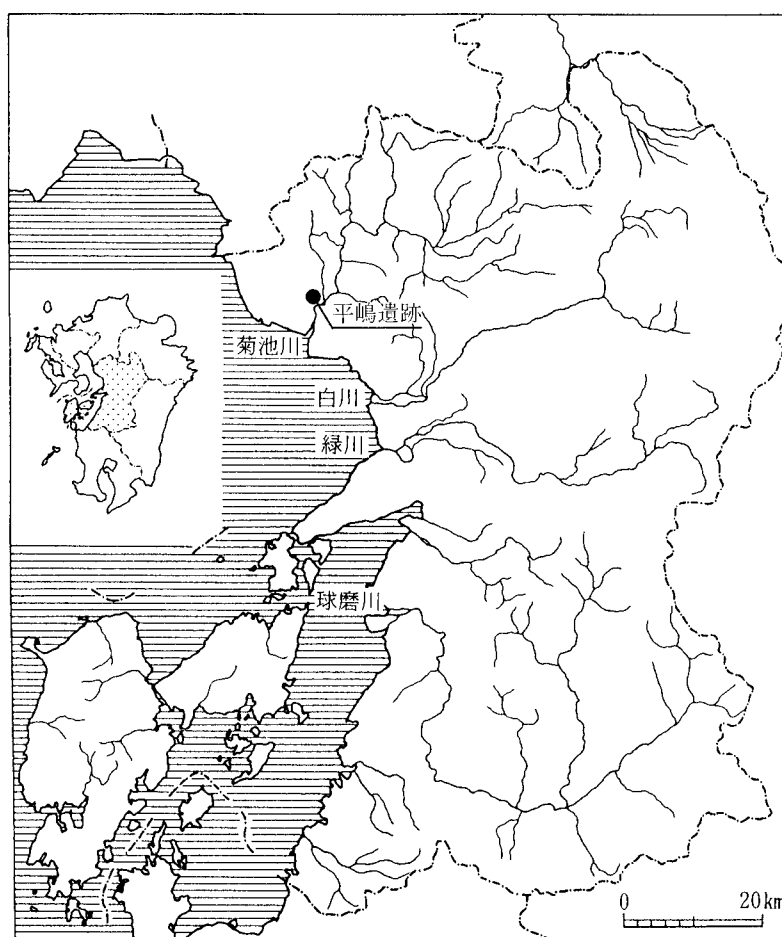


平 嶋 遺 跡

－教職員玉名住宅新築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書－



2 0 0 1 . 1 2

熊本県教育委員会

序 文

熊本県教育委員会では、教職員玉名住宅新築工事に伴う埋蔵文化財調査として、平成11年度に平嶋遺跡の発掘調査を実施しました。

玉名市山田字平嶋に所在する平嶋遺跡では弥生時代の住居跡や平安時代の土坑等が検出されました。

本報告書が埋蔵文化財とその保護に対する理解と認識を深め、活用していただく一助となれば幸いです。

埋蔵文化財調査に際しご協力いただきました方々に心より感謝申し上げます。

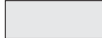


平成13年12月28日

熊本県教育長 田 中 力 男

例 言

- 1 本書は、教職員玉名住宅新築工事に伴い事前に実施した埋蔵文化財調査（平嶋遺跡）の報告書である。
- 2 調査は熊本県教育委員会が実施した。
- 3 当該遺跡の発掘調査は平成11年度に実施し、その整理・報告書作成は平成12年度に行った。
- 4 現地での実測及び写真撮影は後藤貴美子、水上仁が行った。遺構の製図は横山明代が、遺物の実測は下東嘉也、後藤が、遺物の製図は横山が行った。遺物の撮影は後藤が行った。
- 5 当該遺跡の地形図は玉名市から提供を受けたものをもとにして作成した。
- 6 本書の執筆は後藤が行った。
- 7 本書の編集は熊本県文化課が行い、後藤が担当した。

凡 例

- 1 現地での実測図は以下の縮尺で作成した。
住居跡・溝…1/20 土坑…1/10 遺構配置図…1/100
- 2 本書の作成の際には以下の縮尺とした。
住居跡・溝…1/60 土坑…1/30 遺構配置図…1/150
土器…1/3
- 3 遺構の方位は真北である。
- 4 調査区内及び遺構内のアミふせはそれぞれ次の範囲を表現している。
攪乱部分  炭化物  焼土 
- 5 写真のスケールは紙面の都合で任意とした。
- 6 第Ⅱ章で示した周辺主要遺跡分布図及び主要遺跡名については、平成10年発行の「熊本県遺跡地図」（熊本県教育委員会）と同様の番号を付した。
- 7 図版にある出土遺物の写真に付した番号は、実測図の番号である。
例) 13-8 第13図の「8」
- 8 その他の凡例については挿図ごとに付した。

序文

例言・凡例

本文目次

第I章 調査の概要

第1節 調査の経緯…………… 1

第2節 調査の方法と経過…………… 1

第II章 遺跡の概要

第1節 地理的環境…………… 3

第2節 歴史的環境…………… 6

第3節 遺跡の層位と包含層…………… 7

第III章 調査の成果

第1節 弥生時代の遺構と遺物…………… 9

第2節 古代の遺構と遺物…………… 22

第3節 その他の遺構と遺物…………… 27

第IV章 まとめ…………… 33

報告書抄録

図版

挿図目次

第1図 周辺地形図…………… 2

第2図 地形区分図…………… 3

第3図 平嶋遺跡周辺主要遺跡分布図…………… 4

第4図 土層模式図…………… 7

第5図 竪穴住居跡全体配置図…………… 9

第6図 1号竪穴住居跡実測図…………… 10

第7図 2号竪穴住居跡実測図…………… 11

第8図 2号竪穴住居跡出土遺物実測図…………… 11

第9図 3号竪穴住居跡実測図…………… 12

第10図 3号竪穴住居跡出土遺物実測図…………… 12

第11図 4号竪穴住居跡遺物出土状況…………… 13

第12図 4号竪穴住居跡実測図…………… 13

第13図 4号竪穴住居跡出土遺物実測図(1) …… 14

第14図 4号竪穴住居跡出土遺物実測図(2) …… 15

第15図 5号竪穴住居跡実測図…………… 15

第16図 5号竪穴住居跡出土遺物実測図…………… 15

第17図 6号竪穴住居跡実測図…………… 16

第18図 6号竪穴住居跡出土遺物実測図…………… 16

第19図 7号竪穴住居跡実測図…………… 16

第20図 8号竪穴住居跡実測図…………… 16

第21図 8号竪穴住居跡出土遺物実測図…………… 17

第22図 9号竪穴住居跡炭化物・焼土分布図…………… 18

第23図 9号竪穴住居跡実測図…………… 18

第24図 9号竪穴住居跡出土遺物実測図…………… 18

第25図 10・11号竪穴住居跡実測図…………… 19

第26図 10号竪穴住居跡出土遺物実測図…………… 19

第27図 土坑全体配置図…………… 22

第28図 1・2号土坑実測図…………… 23

第29図 1号土坑出土遺物実測図…………… 23

第30図 2号土坑出土遺物実測図…………… 23

第31図 3号土坑実測図…………… 23

第32図 溝・不明遺構・ピット全体配置図…………… 24

第33図 溝実測図…………… 25

第34図 溝出土遺物実測図…………… 26

第35図 不明遺構実測図…………… 26

表 目 次

第1表 平嶋遺跡周辺主要遺跡地名表……………5	第3表 平嶋遺跡報告書掲載土器観察表……………30
第2表 平嶋遺跡竪穴住居跡一覧表……………29	

図 版 目 次

図版1 平嶋遺跡（1）	2 3号竪穴住居跡完掘状況
1 平嶋遺跡遠景（南から）	3 4号竪穴住居跡完掘状況
2 平嶋遺跡調査区全景（南東から）	4 8号竪穴住居跡完掘状況
図版2 平嶋遺跡（2）	5 8号竪穴住居跡南側ベッド部除去後状況
1 溝遺物出土状況（全体）	6 11号竪穴住居跡完掘状況
2 溝遺物出土状況（部分）	図版4 平嶋遺跡（4）
3 溝完掘状況（全体）	1 9号竪穴住居跡炭化物出土状況
4 溝完掘状況（部分）	2 2号土坑遺物出土状況（全体）
5 4号竪穴住居跡遺物出土状況（全体）	3 2号土坑遺物出土状況（部分）
6 4号竪穴住居跡遺物出土状況（部分）	図版5 平嶋遺跡出土遺物（1）
図版3 平嶋遺跡（3）	図版6 平嶋遺跡出土遺物（2）
1 2号竪穴住居跡完掘状況	

第 I 章 調査の概要

第 1 節 調査の経緯

平成11年、熊本県教育庁総務福利課から同文化課に対して埋蔵文化財調査が依頼された。内容は教職員玉名住宅新築工事に伴うものである。これを受けて文化課では同年7月7日に試掘調査を行った。

試掘調査では、任意に4箇所のトレンチ（試掘坑）を設定し、調査を実施した。その結果、2つのトレンチから弥生時代の土器や柱穴遺構が確認され、工事に着手する前に発掘調査が必要である旨通知した。

これを受けて熊本県教育庁総務福利課と同文化課との間で協議を重ね、本調査が必要であると文化課が回答した約1500m²のうち、遺跡に影響が及ぶと予想される約250m²の範囲について、発掘調査を実施することとした。発掘調査は平成11年10月12日に開始し、平成11年12月1日に終了した。調査期間は約1.5ヶ月である。

第 2 節 調査の方法と経過

発掘調査は住宅建設予定地の東側半分について実施したもので、幅約7m、長さ約33mである。北辺の2箇所は階段部分となっており、幅約3m、長さ約7mの長方形が張り出している。

調査に用いる基準点は調査区内外に任意で設置した。グリッドは3mごとに設定し、長辺の北東から順に1から11の数字を、短辺の北西から順にAからFのアルファベットをあてた。

調査区は旧教職員住宅を取り壊したあと整地されており、表土を50～100cmはいだところから建物の基礎をはじめとする攪乱が縦横にはしる状況であった。表土剥ぎ後の状況としては、当該地の高い箇所を削り、低い部分に盛土する形で平坦面が造成されており、東側の削平が特に顕著であった。

調査区西側にはほぼ南北方向に推定幅6m前後、深さ約2mの溝が検出されたが、地山が粘性の強い土であるため滑りやすく、特に安全面で注意を払いながら掘り進めた。

出土した遺物は弥生時代のものが大部分であった。部分的にトレンチ（試掘坑）を設定し掘削したがその下位から遺構や遺物は確認されず、調査を終了した。

◎調査の組織

調査主体 熊本県教育委員会

■発掘調査（平成11年度）

調査責任者 豊田貞二

（首席教育審議員兼文化課長）

川上康治（課長補佐）

調査総括 島津義昭（課長補佐）

江本 直

（主幹兼文化財調査第2係長）

調査担当 後藤貴美子（文化財保護主事）

水上 仁（嘱託）

調査事務 小斎久代（総務係長）

廣瀬泰之（参事）

川口久夫（主事）

■報告書作成（平成12年度）

調査責任者 阪井大文（文化課長）

川上康治（課長補佐）

調査総括 島津義昭（課長補佐）

江本 直

（主幹兼文化財調査第2係長）

調査担当 後藤貴美子（文化財保護主事）

横山明代（嘱託）

下東嘉也（嘱託）

調査事務 中村幸宏（主幹兼総務係長）

廣瀬泰之（参事）

杉村輝彦（主事）



第 1 図 周辺地形図 (1:5,000)

第II章 遺跡の概要

第1節 地理的環境

遺跡が所在する熊本県玉名市は県北に位置する。行政区画でみると玉名市は北を玉名郡南関町、西を荒尾市・同郡岱明町、南を同郡横島町・同郡天水町、東を同郡玉東町・同郡菊水町とにそれぞれ接している。本遺跡が所在する玉名市山田は市の西部に位置し、隣接する玉名市築地をはさんで岱明町と接する地点にある。

菊池川はこの玉名市の北東から南西にかけて貫流する一級河川で本流が全長約61km、流域面積はおよそ996km²におよぶ。川は阿蘇外輪山の西方にある尾ノ岳に源を発し、上流では水流が発電に利用され、景勝地である菊池溪谷を有している。中流では平野部周囲の台地に阿蘇溶結凝灰岩が露呈し、石材の産地となっているところもある。下流では県下有数の穀倉地帯である玉名平野を形成する。この沖積平野は遠浅の海岸部とつながり有明海に流れ込んでいる。この地域の活発な干拓事業は加藤清正の時代に始まり、のち現代に至るまで随時行われてきた。

玉名市周辺の地勢を概観すると、西方は有明海（島原湾）に面し、北方から東方、南方にかけては300～600m前後の山々が点在する。菊池川下流域には平野・干拓地がひらけ、山地との間に沖積低地、台地・丘陵が広がっている。

本遺跡の北方には小岱山地がある。小岱山は筒ヶ岳（501.4m）を主峰とし、南南西から北北東にかけて直線状の尾根をもつ。山腹の傾斜角は20～40度で、急峻な傾斜地が多い。

小岱山とそのまわりには花崗岩が広く分布する。花崗岩は筒ヶ岳花崗岩と玉名花崗閃緑岩に大別され、前者は白雲母の結晶を含み角閃石の結晶を含まない点、後者は白雲母の結晶は含まないが角閃石の結晶を含む点が異なる。小岱山麓では花崗岩が風化して堆積した粘土を産し、陶土として利用されている。

遺跡は小岱山の南麓に位置しており、山地から台

地、さらに平野部へ向かって傾斜する縁辺部にあたる。標高は12～13mで、調査区の南方から西方にかけては盛り土をして平坦面を拡張している。（盛り土をした平坦面は発掘本調査対象地外にも広がっている。）

遺跡の西方には小岱山南麓に源を発する境川が菊池川右岸に沿って南流し、そのまま有明海へ注いでいる。



第2図 地形区分図





第 3 圖 平 陽 遺 跡 周 邊 主 要 遺 跡 分 布 圖

第1表 平嶋遺跡周辺主要遺跡地名表

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
206-020	石貫葉終	石貫 葉終	弥生・古墳	包蔵地		弥生土器片多量、土師器
206-045	青木磨崖梵字群	青木 田代上前田	中世	石造物	県	熊野社境内20数個の梵字あり
206-054	西田支石墓	築地 免町	弥生	埋葬		弥生・石斧出土
206-063	五郎丸	山田 下馬場	弥生	包蔵地		微高台地、他の弥生土器も伴出
206-083	山田中島	山田 中島	弥生	包蔵地		合口壺棺1基出土
206-074	徳蔵坊跡	山田 上馬場	中世	寺社		五輪塔
206-084	山田松尾平	山田 平	弥生	包蔵地		高台地南斜面、弥生期土師片・石器
206-091	玉名群家跡	立願寺 石丸	古代	包蔵地		上立願寺部落北辺、布目瓦多量散布
206-093	松尾原	立願寺 松尾原ほか	弥生	埋葬		合口の大小甕棺15個出土。上立願寺遺跡
206-097	玉名群倉跡	立願寺 西の段	古代	包蔵地	市	礎石7個配列
206-098	下立願寺	立願寺 西の段	縄文～中世	集落		単式甕棺、弥生土器片散布
206-109	大坊古墳	玉名 出口	古墳	古墳	国	横穴2室、三角連続彩色あり
206-116	岡箱式石棺群	玉名 上原	弥生	埋葬		妙修寺の墓地内3基・2基保存
206-117	永安寺西古墳	玉名 (通称永安寺)	古墳	古墳	国	横穴単式、円墳線刻
206-118	永安寺東古墳	玉名 (通称永安寺)	古墳	古墳	国	横穴複式、円・三角・舟・馬を描く
206-138	両迫間日渡	両迫間 日渡	弥生・古墳	包蔵地		弥生土器・土師器・須恵器包含、水田中
206-155	浄光寺蓮華院跡	築地 南大門	中世	寺社	市	仏具・仏像等出土、現在新寺建つ。出土品は市指定
206-160	南大門	築地 南大門	弥生～古代	埋葬		付近一帯弥生後晩期土器包含
206-162	東南大門	築地 南大門	弥生～中世	包蔵地		弥生後期、土師器多量出土。
206-163	古閑	築地 古閑	弥生～中世	包蔵地		合口壺9基出土、弥生土器散布、鉄器・弥生甕棺
206-164	築地東	築地 東	弥生	包蔵地		石蓋土坑
206-174	高岡原	山田 高岡原	弥生・古墳	包蔵地		土師器・須恵器・弥生土器片散布
206-175	高岡いっちょう畑箱式石	山田 高岡原	弥生	埋葬		箱式石棺のみ露出
206-178	玉名高校々庭	中 橋林	弥生・古墳	包蔵地		弥生土器・土師器包含、石斧も出土
206-184	南出	中 内田	弥生	包蔵地		弥生カメ棺、合口カメ棺。青磁碗、玉名高校蔵
206-186	南出甕棺群	中 内田	弥生	埋葬		国道208号沿い、近くは弥生以降遺跡
206-196	伝左山古墳	繁根本 北	古墳	古墳	市	国道208号沿線径37mの円墳、出土品多量
206-201	繁根本遺跡群	繁根本	弥生	包蔵地		稲荷山古墳の最下層、弥生土器群あり
206-207	高瀬船着場跡 (高瀬津跡)	永徳寺 東河原	近世	包蔵地	市	蔵下川岸、2箇所石組、石置現存
206-210	高瀬眼鏡橋	高瀬 下町	近世	建造物	県	高瀬裏川にかかる、嘉永元年二重拱橋
206-212	保田木貝塚	高瀬 保田木町	縄文	貝塚		城跡神社境内全域、阿高式中心
206-219	岩崎原	岩崎 (通称岩崎原)	弥生～中世	包蔵地		玉名女子高構内全、弥生土器多量、住居跡
206-220	岩崎A	岩崎 池田	弥生～中世	包蔵地		大型甕棺・土師器・須恵器・弥生土器多量包含
206-227	桃田貝塚	大倉 桃田原	縄文	貝塚		J R 線北2箇所、阿高式～土師器・須恵器
206-243	亀頭迫	大倉 亀頭迫など	弥生～中世	包蔵地		土師器・弥生後期
206-245	立山	大倉 (通称立山)	弥生～中世	包蔵地		弥生後期、土師器等散布
206-292	大浜河床	大浜 上屋敷	弥生～中世	包蔵地		石剣出土地
206-295	五社支石墓参考地	伊倉北方 五社	弥生	埋葬		十五社石祠、旧城跡にあり、台石は掌石か
206-297	城が崎貝塚	伊倉北方 五社下	弥生	貝塚		町北端舌状台地上、南裾一帯弥生貝塚出土多量
206-298	城が崎	伊倉北方 五社	弥生～中世	包蔵地		町北端舌状台地上、広範囲に弥生中期遺物を含む
206-299	中北A	伊倉北方	弥生～中世	埋葬		小見合口式4基出土、1期鉄斧、外副葬品
206-316	唐人町貝塚	北方	弥生～中世	貝塚		
206-320	片諏訪貝塚	片諏訪 屋敷	縄文～鎌倉	貝塚		
206-321	片諏訪	片諏訪 屋敷	弥生	包蔵地		貝塚のある台地一帯
206-326	宮原土井の内	宮原 土井内	弥生	包蔵地		弥生石器・土器出土
206-327	禮社	宮原 禮社	弥生	包蔵地		弥生土器散布
206-328	伊倉宮原町	宮原 屋敷	弥生	包蔵地		弥生土器散布
206-331	伊倉宮川	宮原 宮川	弥生	包蔵地		弥生土器・石器
206-335	伊倉宮の後甕棺群	伊倉北方 宮の後	弥生	埋葬		合口甕棺多数
206-336	伊倉古宮原	宮原 古宮原	弥生	包蔵地		弥生土器・土師器・須恵器散布
206-482	柳町	玉名市河崎柳町	縄文～平安	集落		県調査、文字資料
206-483	玉名平野条里跡	玉名、迫間ほか	古代・中世	生産		
206-490	平嶋遺跡	山田 平嶋	弥生・古代	集落		弥生後期の集落、平成11年度調査
361-039	年の神	野口 平	弥生後期	包蔵地		甕棺、住居跡、貝塚、年の神西平遺跡、年の神遺跡
361-044	年の神小児甕棺群	野口 北平	弥生	埋葬		合口壺形棺数基
361-045	年の神甕棺群 (A)	野口 早馬	弥生中期	埋葬		大型3基
361-046	年の神甕棺群 (B)	野口 早馬	弥生	埋葬		3個接合を中心とする
361-047	塚原石蓋土壘墓群	野口 塚原	弥生	埋葬		石蓋土、2基出土した
361-054	下前原	下前原 正林	弥生	包蔵地		昭和32年発掘調査、鉄器をもつ
361-055	塚原箱式石棺群	野口 塚原	弥生	埋葬		弥生土器・須恵器少量
361-060	北尾崎	野口 北尾崎	弥生	包蔵地		弥生晩期土器・貨銭出土、A・B区
361-062	貴船東	野口 貴船	弥生	包蔵地		弥生土器片の1群出土
362-001	大園貝塚	大園 大園	弥生	貝塚		弥生土器・石斧
362-006	外平貝塚	横島 外平	弥生・中世	貝塚		主に土師器
363-001	野部田	野部田 前田・平	弥生	包蔵地		弥生、住居・集落
363-002	竹崎貝塚	竹崎 山崎	縄文・弥生	貝塚		阿高式土器・石斧・石錘
363-005	竹崎	竹崎 本村屋敷	弥生	埋葬		甕棺散布地

※周辺主要遺跡分布図及び周辺遺跡地名表については、平成10年発行の「熊本県遺跡地図」(熊本県教育委員会)と同様の番号を付した。市町村コードにあたる3桁の数字に対応する市町村は以下の通りである。

206…玉名市、361…玉名郡倍明町、362…同郡横島町、363…同郡天水町

第2節 歴史的環境

1 旧石器時代

玉名市内では確認されていない。玉名郡内では岱明町年の神遺跡、菊水町西中原遺跡などでナイフ形石器等が確認されている。いずれも表面採集資料である。

2 縄文時代

有明海沿岸に沿って、微高地や台地の縁辺部などには繁根木貝塚・保田木貝塚・桃田貝塚・片諏訪貝塚など多くの貝塚が分布しており、当時の海岸線が内陸のほうに入りこんでいた様子をうかがうことができる。貝塚に含まれる土器は前期から後・晩期のものまでさまざまである。

3 弥生時代

玉名市周辺の弥生時代の遺跡は菊水町の丘陵性台地から玉名平野にかかる菊池川右岸、金峰山の北麓から続く伊倉の丘陵性台地、そして小岱山の南麓に続く玉名台地の縁辺に集中する傾向が見られる。同様の立地で甕棺群や箱式石棺、支石墓などの埋葬地も多く確認されている。

菊池川河口付近の台地縁辺部に所在する天水町斎藤山貝塚では弥生時代初頭の鉄斧が出土している。同町野部田遺跡から出土した土器は、野部田式土器として弥生時代後期後半の標式土器の一つになっている。

また菊池川中流域には弥生時代後期から古墳時代前期にかけての環濠集落である山鹿市方保田東原遺跡や、同じく弥生時代後期の環濠集落である菊池郡七城町うてな遺跡などがある。

玉名市内の遺跡としては木製短甲の部品等、多量の木製品が出土した柳町遺跡が、また本遺跡から北方に続く台地上には土器の散布状況から集落の存在が予想されている高岡原遺跡などがある。

なお今回の調査では、弥生時代後期の竪穴住居跡11棟を検出した。

4 古墳時代

菊池川流域で大きな特色となっているのが古墳時代である。菊池川流域は舟形石棺の分布密度が全国でもっとも高い地域であり、装飾古墳については全国で知られる484例のうちその4割にあたる186基が県内に、うち6割以上が菊池川流域に分布している。

市の北部から菊池川中流域にかけては凝灰岩を掘りこんだ横穴や横穴式石室を有する古墳が多く存在する。玉名市大坊古墳、永安寺東・西古墳、石貫ナギノ横穴群、石貫穴観音横穴群等はいずれも装飾を有し、国指定となっている。また前方後円墳・円墳なども数多く築造され、玉名郡菊水町江田船山古墳など著名な古墳も多い。

5 古代

律令制下において、小岱山南東麓から続く玉名市立願寺は日置氏を郡司とする玉名郡衙が置かれていたところである。寺院、郡家、郡倉等の発掘調査がなされており、各施設で存続時期は異なるが、全体的には7世紀末から9世紀末にかけての時期と推定されている。また同市の東に接する玉名郡玉東町には山本郡の郡寺に比定されている稲佐廃寺がある。

本遺跡の西約500mの所には南大門遺跡・南大門窯跡がある。本遺跡からは古代のものと思われる土坑が3基検出され、遺物としては溝に流れ込んだ状態で布目瓦が1点出土している。

また、菊池川が玉名平野に入り東に大きく蛇行する右岸の平野部には条里制の遺構も見られる。

古代から中世にかけては小岱山地を中心とした地域に30箇所以上の製鉄遺跡が分布することも特記しておきたい。

6 中・近世

菊池川河口の高瀬は中世のころは高瀬津とよばれ、対外貿易の拠点の一つとして栄えた。現在でも青磁片など貿易陶磁を採集することができる。近世には高瀬支藩が置かれ、五ヶ町の一つとして町奉行が置かれるなど他の在町とは異なる扱いを受けた。

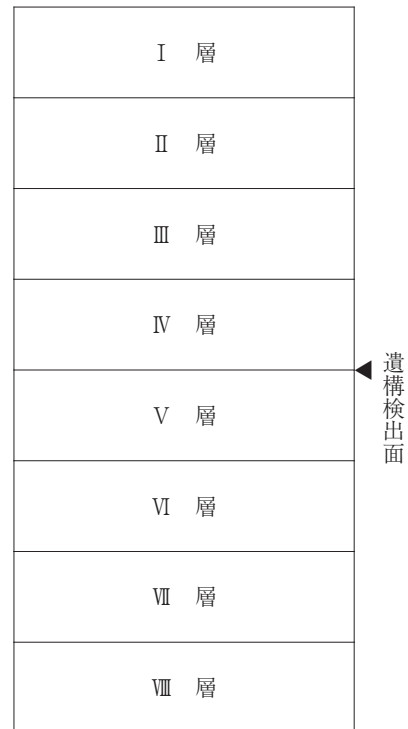
遺跡の所在する玉名市山田字平嶋は旧山田村に属し、中世には集落としての形態が整ったとされる。

日吉神社の参道の両側に氏子の集落が広がっており、古い集落形態を残している。

第3節 遺跡の層位と包含層

第I章で述べたとおり、当該地は削平と盛土により原地形をとどめているところが極めて限られていた。攪乱土を除去すると、調査区の東側ではピンポン玉大の礫をふくむ赤みを帯びたやや粘性の強い層が、中央から西にかけては褐色を帯びたやや粘性の強い層が現れた。粘性は下位になるにつれ強まる傾向がある。

- I層 整地層。
- II層 攪乱。
- III層 褐色土。
砂粒がまじる。やや粘性あり。
- IV層 暗褐色土。
砂粒がまじる。やや粘性あり。
- V層 暗褐色土。
IV層より粘性強い。この上面が遺構検出面。
- VI層 暗褐色土。
V層より色調は黄色みを帯び、粘性も強まる。
- VII層 黄白灰色土。
粘性強い。マンガン含む。
- VIII層 暗赤褐色土。
粘性強い。マンガン含む。



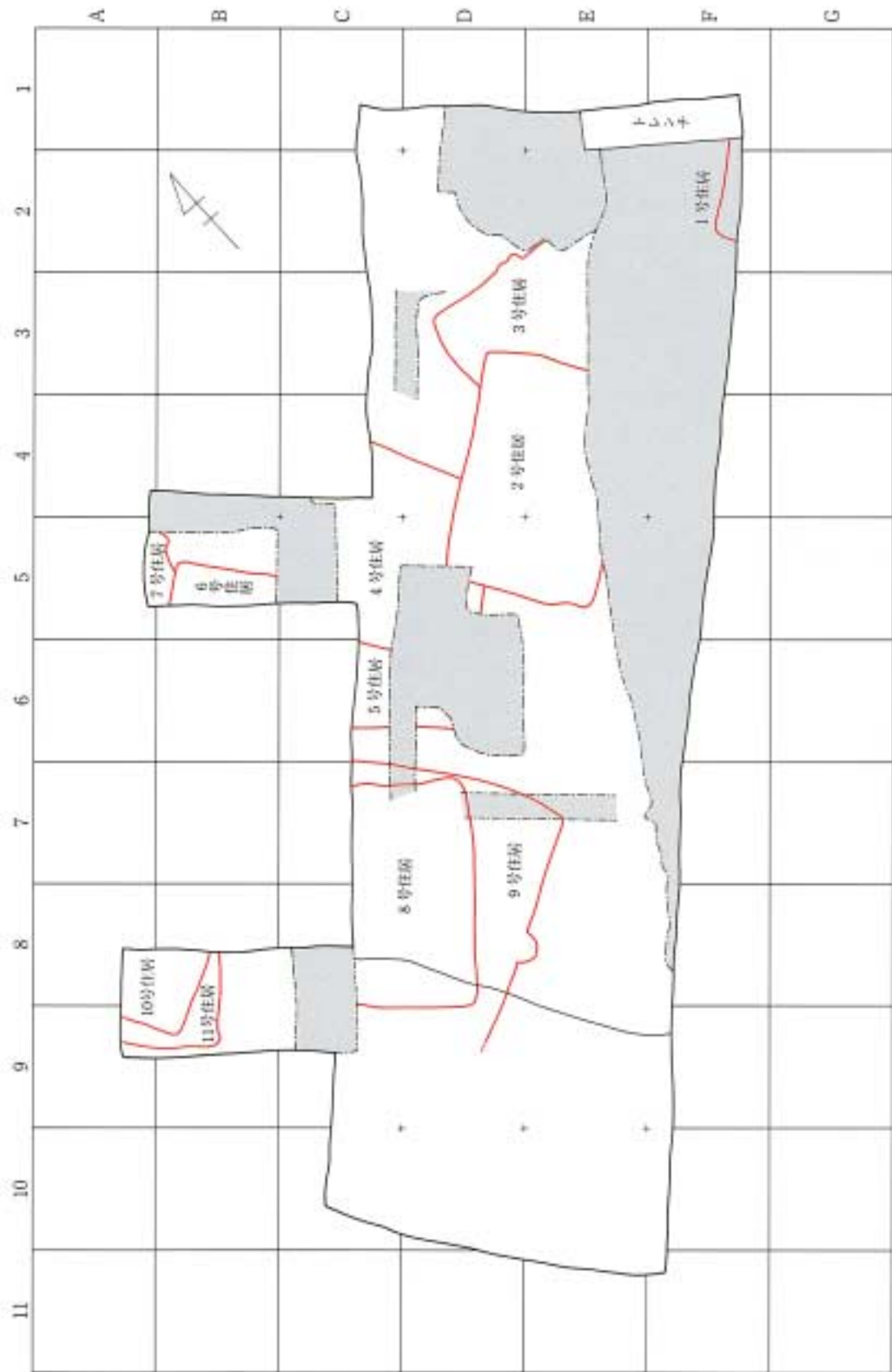
第4図 土層模式図

第3節 遺跡の層位と包含層

<第Ⅱ章 参考文献>

- 1 熊本県教育委員会「熊本県遺跡地図」平成10年
- 2 熊本県教育委員会「熊本県文化財調査報告第81集 熊本県旧石器時代調査報告」昭和61年
- 3 熊本県教育委員会「熊本県文化財整備報告第3集 肥後古代の森」平成7年
- 4 玉名市・秘書企画課「玉名市歴史資料集成第12集 玉名郡衙」平成6年
- 5 熊本県教育委員会「熊本県文化財調査報告第31集 菊池川流域文化財調査報告」昭和53年
- 6 保存科学研究会東京支部「史跡大坊古墳保存工事報告書」熊本県玉名市教育委員会、1979年
- 7 荒尾市史編集委員会「荒尾市史」荒尾市、平成12年
- 8 玉名市史編集委員会「玉名市史 資料篇2 地誌」玉名市、平成4年
- 9 玉名市史編集委員会「玉名市史 資料篇3 自然・民俗」玉名市、平成5年
- 10 南関町史編集委員会「南関町史 資料」南関町、平成9年
- 11 玉東町史編集委員会「玉東町史 通史編」玉東町、平成7年
- 12 「郷土資料事典43 熊本県」株式会社ゼンリン、1998年
- 13 「日本歴史地名大系44 熊本県の地名」平凡社、1985年
- 14 田添夏喜・玉名市文化財保護委員会「文化財めぐり」玉名市史編集委員会、昭和60年
- 15 「横島干拓入植一しあわせを求めて」横島干拓入植20年記念誌編集委員会、平成5年

ほか



第 5 図 竪穴住居跡全体配置図

第三章 調査の成果

第1節 弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構としては竪穴住居跡11棟を検出した。以下順に述べていくことにする。なお法量等の数値や文中で使用する用語などについては第2表「平嶋遺跡竪穴住居跡一覧表」にまとめた。また、遺物のレイアウトは基本的に出土地点が下位の層から上位の層へとなるように並べることにした。完形の遺物（土器）はほとんど出土していない。大部分の土器は磨滅の度合いが激しく、調整が観察できないものも多かった。

1号竪穴住居跡（第6図）

調査区東隅に位置する。大部分が調査区外のため詳細は不明であるが、調査区壁にかかった断面の規模から住居跡と判断した。平面形式は方形である。

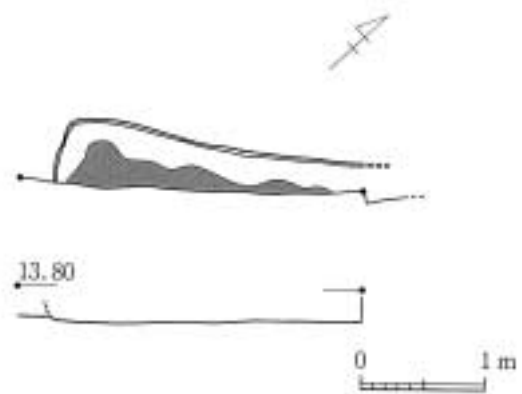
遺構は表土はぎ直後に検出した。ほとんど床面しか残っていない状況であったが、炭化物の広がり確認できた。ピットは検出していない。

土器の胴部片が数点出土したが、いずれも磨滅していた。

2号竪穴住居跡（第7・8図）

調査区の東よりに位置する。東側は削平されていたが、かろうじて床面は確認できた。平面形式は長方形で、短辺に沿って両側にベッド状遺構が配される。残存する壁高は約30cm、床面とベッド部の比高差は約20cmである。主柱本数は2本と思われる。

ベッド部は粗掘りした後盛土で成形される。東側ベッド部の北側には流れ込みの状態で炭化物が集中していた。溝状遺構は床面とベッド部の境を切れ切れにめぐる。深さは約2～4cmである。中央ピットはおよそ径50cm×深さ10cmの円形、貯蔵穴は長径45cm×短径33cm×深さ20cmの楕円形である。ともに埋土は極暗褐色土で、炭化物（1～2cm）・焼土を含む。



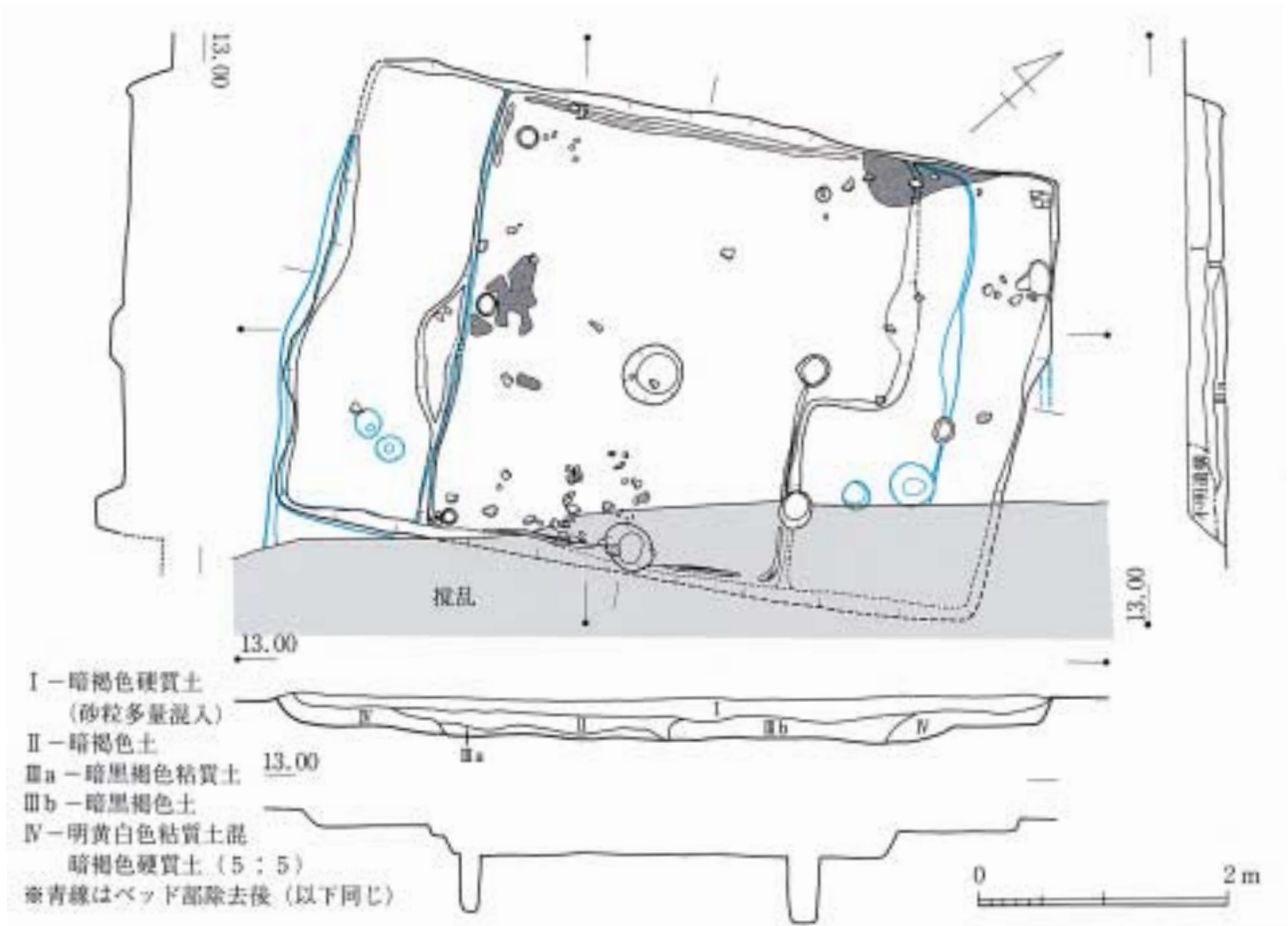
第6図 1号竪穴住居跡実測図

1・2・4は床面直上（以下床直）で出土した土器である。1は甕で、口縁端部は欠損する。磨滅するが一部に黒斑がある。2は甕の脚台である。端部は磨滅するが、内外面にハケメ調整が観察される。3は高坏脚柱の裾部である。磨滅のため調整は不明である。4は高坏の口縁部である。磨滅のため調整は不明である。5～10は1層および一括取り上げの土器である。5は小型壺の口縁部である。非常にもろく、剥落が激しい。6は高坏の口縁部である。同様の形態の口縁部片が床直でも出土している。7は2層から出土した甕の脚部である。内面にうすくハケメ調整が残る。8はジョッキ型土器と思われる土器の底部である。丁寧に成形されており、他の土器とは胎土・焼成・調整などが異なる印象を受ける。9・10は甕の口縁部である。いずれも磨滅が激しいため調整は不明である。

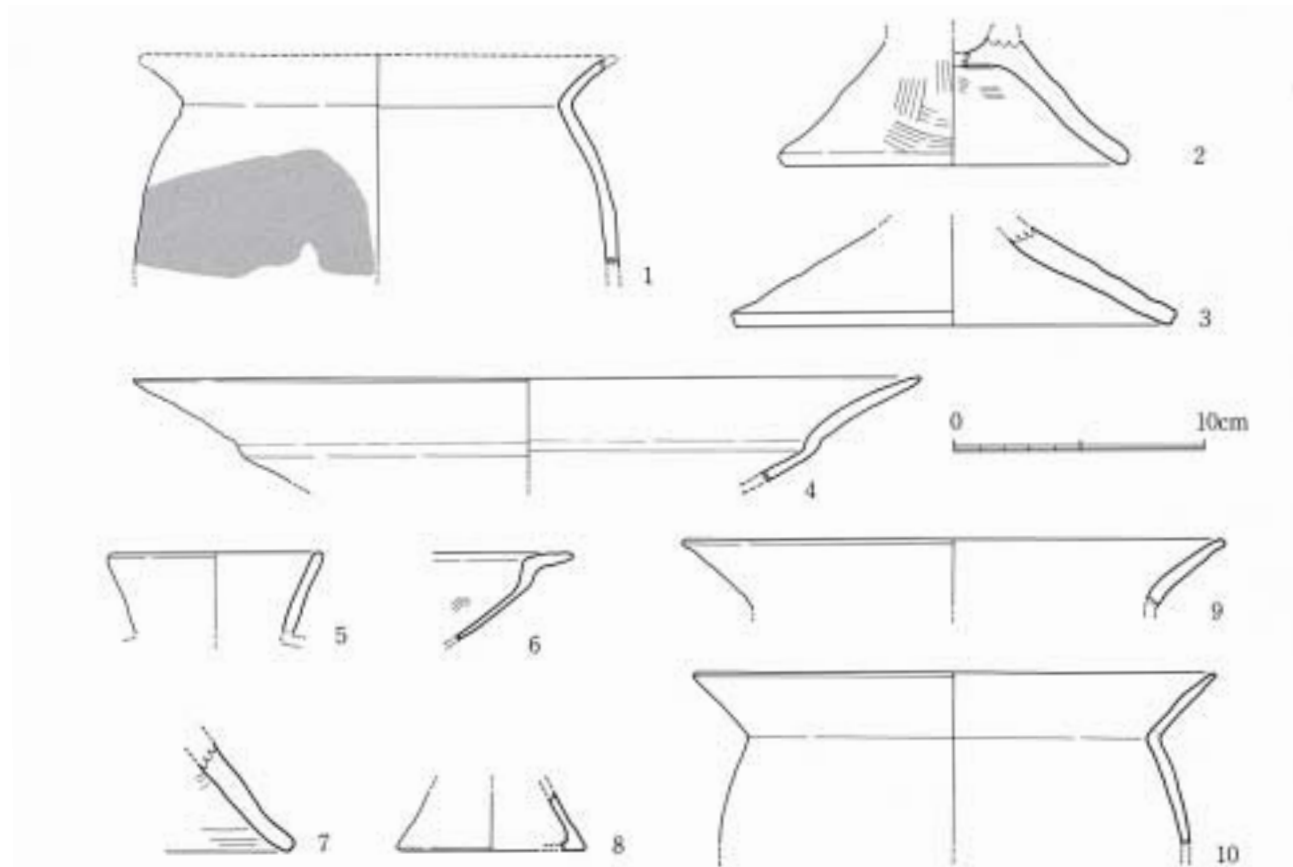
3号竪穴住居跡（第9・10図）

調査区の東よりに位置する。北側上部および東側は削平されており、南側は2号竪穴住居にきられているため規模は不明である。また住居内の一部は2号土坑にきられる。平面形式は長方形になると考えられ、西壁に沿ってベッド状遺構が残り北東隅にもベッド状の高まりが確認される。残存する壁高は約23cm、床面とベッド部の比高差は約23cmである。主柱本数は2本と思われる。

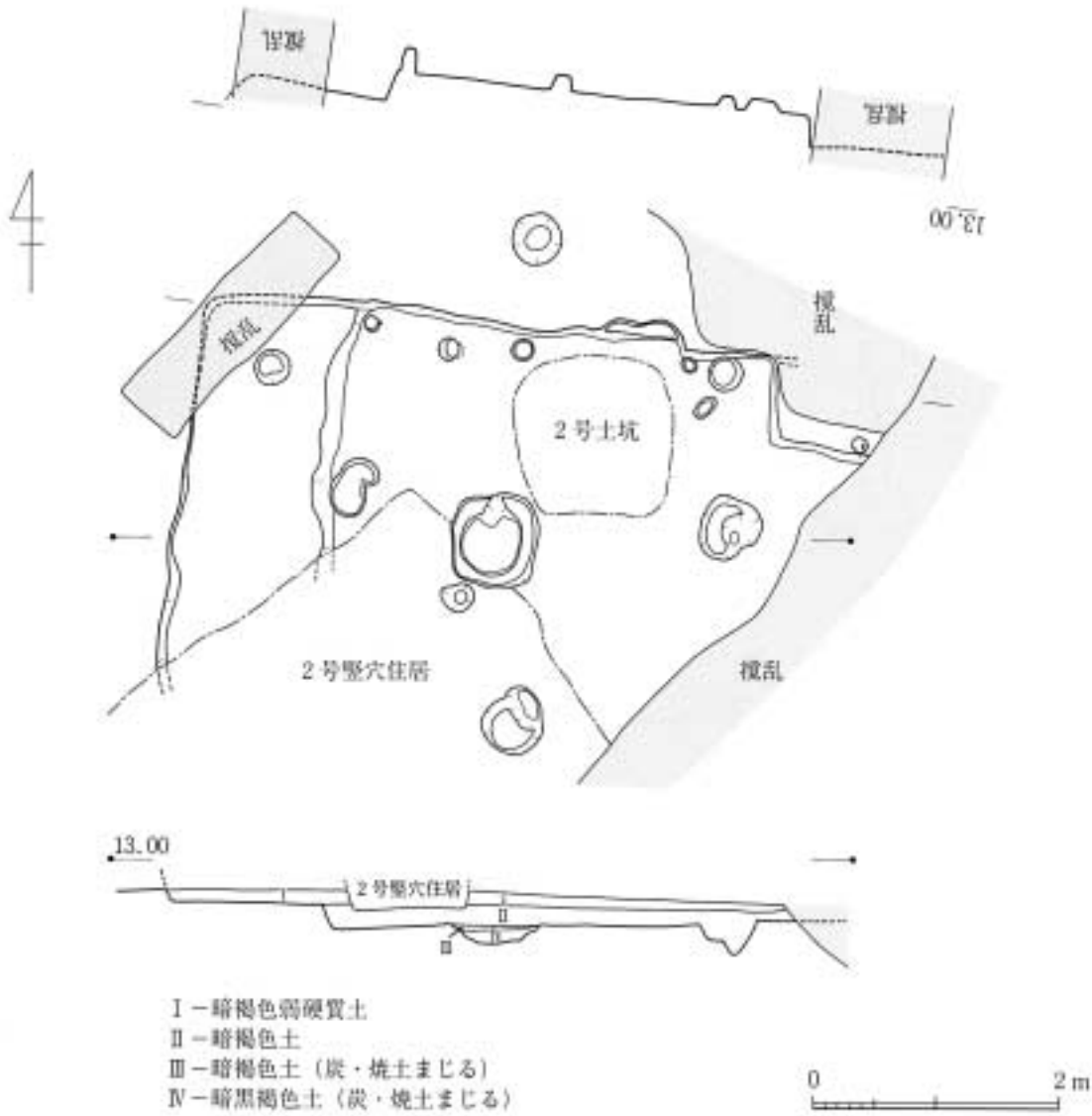
ベッド部は地山を掘りこんで形成される。溝状遺構は確認できない。中央ピットはおよそ70cm四方



第 7 図 2 号 豎 穴 住 居 跡 実 測 図



第 8 図 2 号 豎 穴 住 居 跡 出 土 遺 物 実 測 図



第 9 図 3 号 竖 穴 住 居 跡 実 測 図



第 10 図 3 号 竖 穴 住 居 跡 出 土 遺 物 実 測 図

×深さ14cmの方形、貯蔵穴はおよそ径58cm×深さ15cmの不整形である。ともに埋土は暗褐色土で、炭化物・焼土を含む。

1は1層から出土した甕の口縁部である。磨滅が激しい。2は3層から出土した甕の脚部である。上部に接合面が観察できる。大部分は磨滅するが、内部にうすくハケメ調整が残る。

4号竖穴住居跡 (第11・12・13・14図)

調査区のほぼ中央に位置する。北側及び西側は調査区外にかかり、北西部及び南側は攪乱を受けているため規模は不明である。また東側の一部は2号竖穴住居にきられる。平面形式は長方形と思われる、残存する壁高は約10cmである。ベッド状遺構の有無・支柱本数は共に不明である。

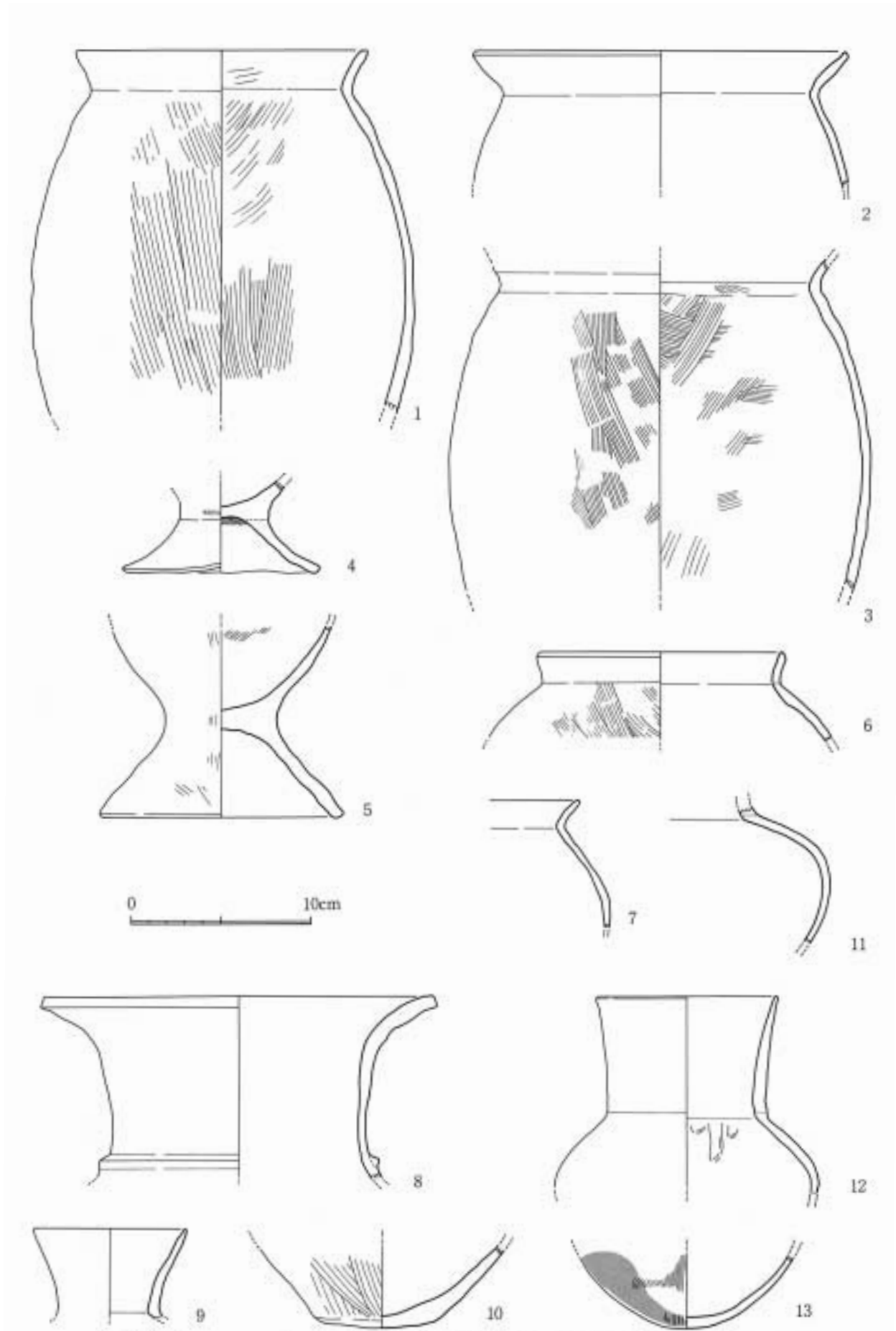
溝状遺構は東壁に沿って検出された。溝は途中で切れており、深さは約3cmである。検出した床面



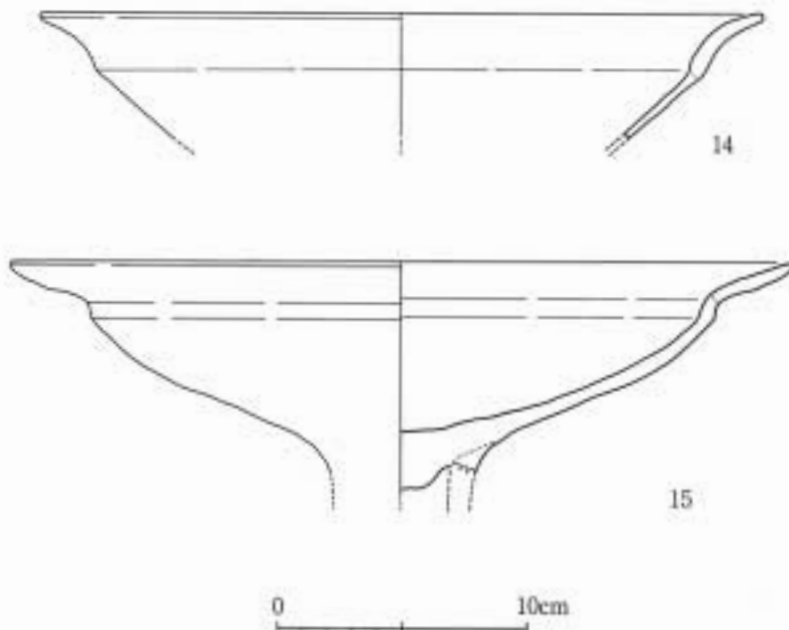
第 11 図 4 号 竖 穴 住 居 跡 遺 物 出 土 状 況



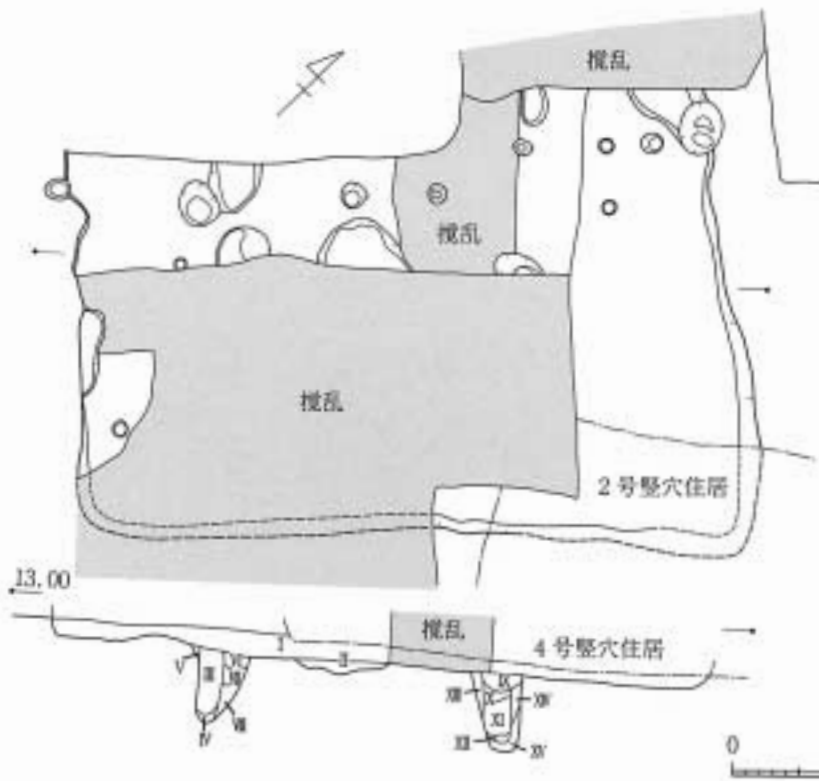
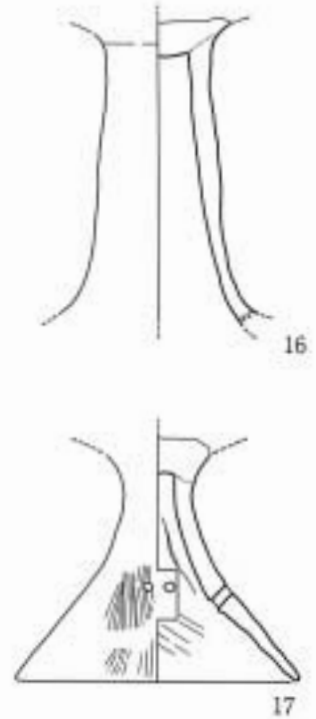
第 12 図 4 号 竖 穴 住 居 跡 実 測 図



第13図 4号竪穴住居跡出土遺物実測図(1)



第 14 図 4 号 豎 穴 住 居 跡 出 土 遺 物 実 測 図 (2)

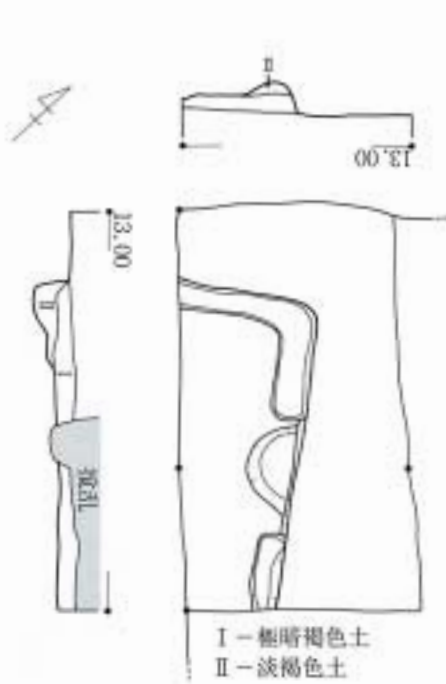


- I - 暗茶褐色土 (茶褐色土混入)
- II - 黒褐色土 (焼土・炭混入)
- III - 明茶褐色土 (暗褐色土混入)
- IV - 明褐色粘質土
- V - 暗褐色弱軟質土
- VI - 褐色土 (しまる)
- VII - 明褐色土 (しまる)
- VIII - 明白褐色軟質粒土
- IX - 暗褐色土 (炭混入)
- X - 暗褐色斑明褐色土
- XI - 褐色斑明褐色土
- XII - 明褐色粘質土
- XIII - 褐色土
- XIV - 明褐色土
- XV - 茶褐色土

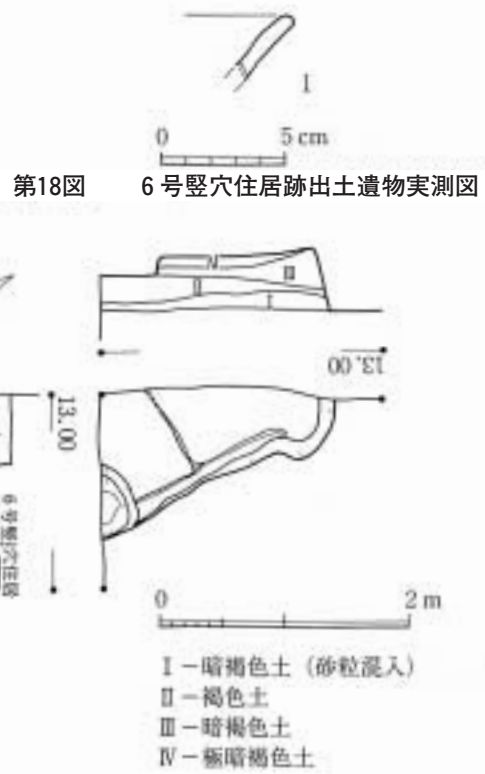
第 15 図 5 号 豎 穴 住 居 跡 実 測 図



第 16 図 5 号 豎 穴 住 居 跡 出 土 遺 物 実 測 図

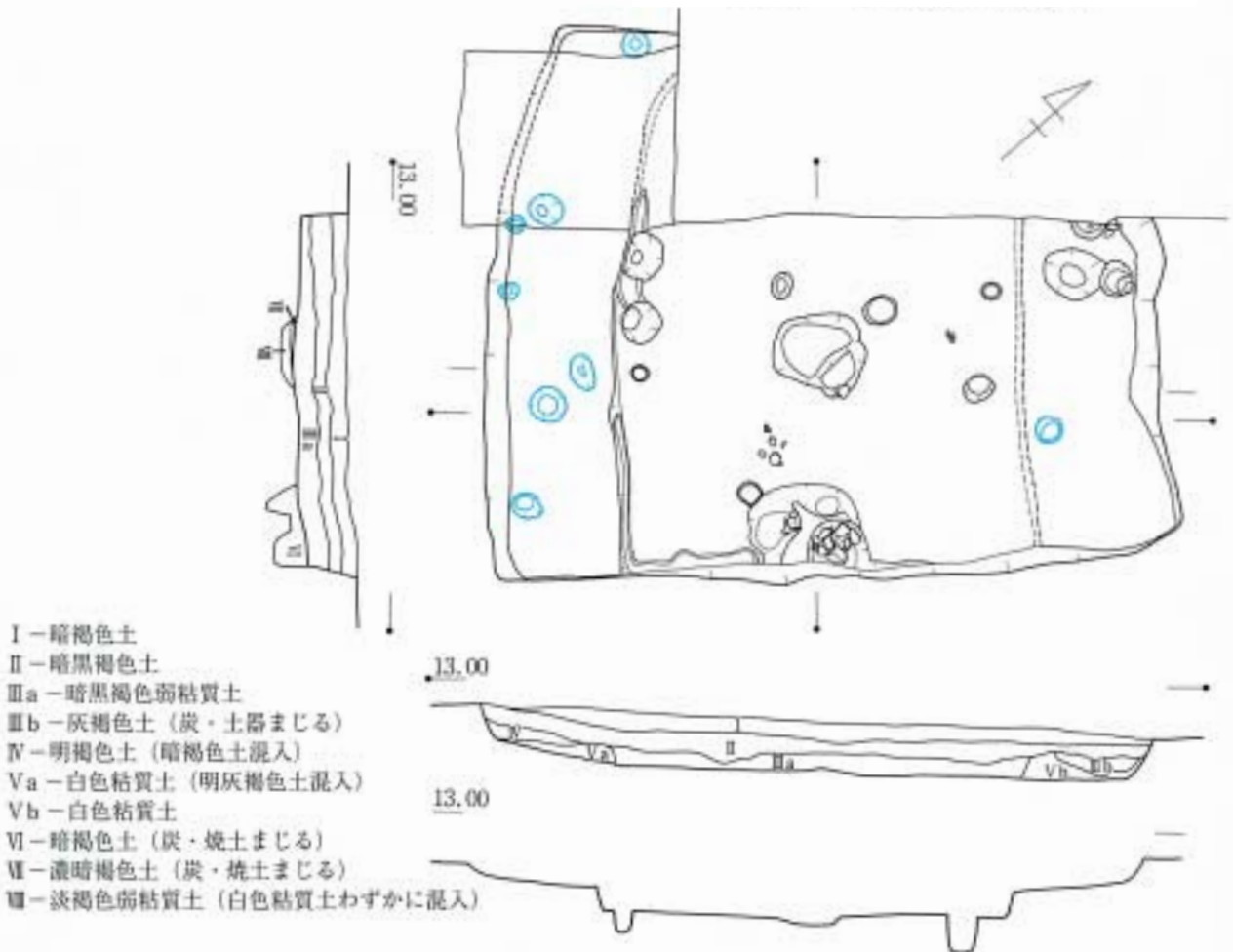


第17図 6号竪穴住居跡実測図

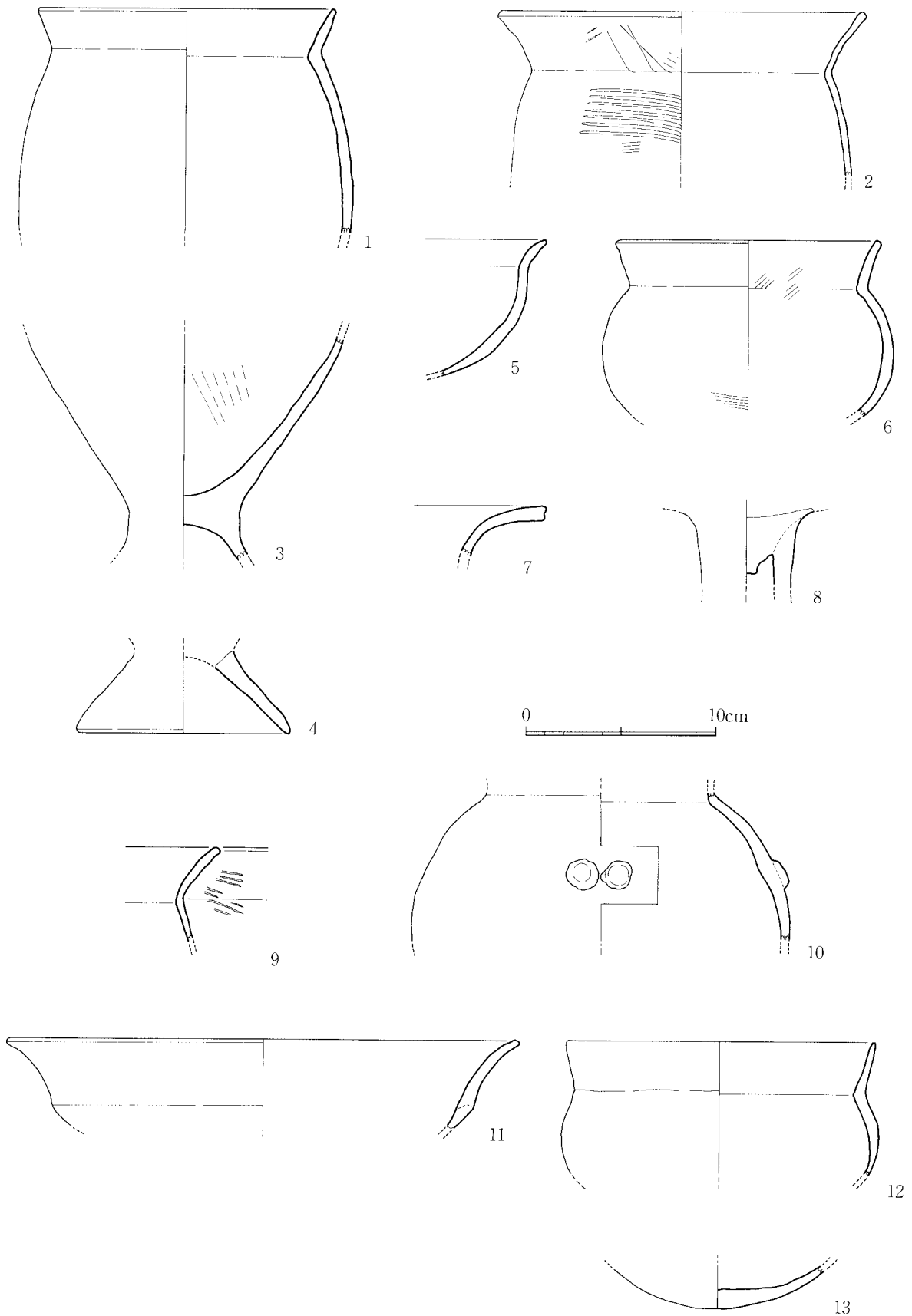


第18図 6号竪穴住居跡出土遺物実測図

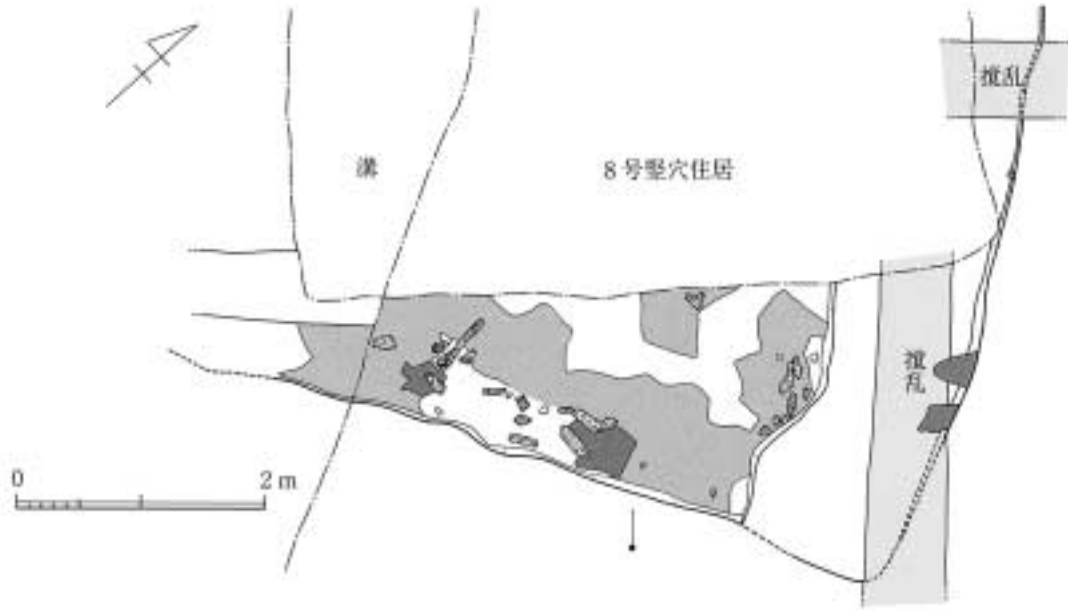
第19図 7号竪穴住居跡実測図



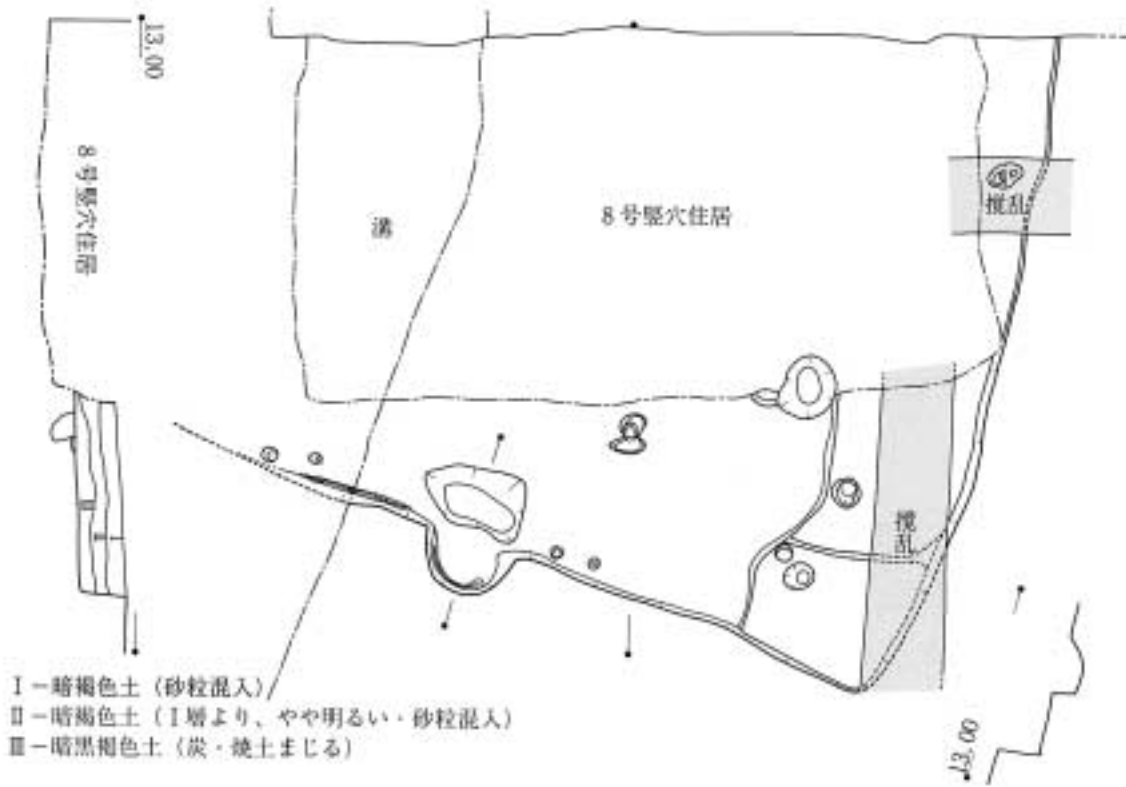
第20図 8号竪穴住居跡実測図



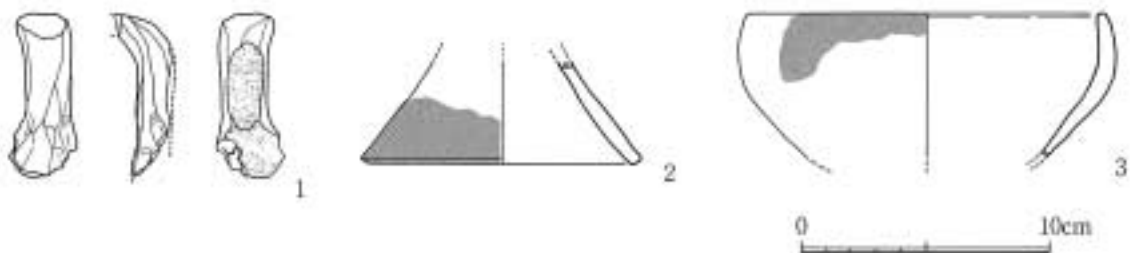
第 21 図 8 号 豎 穴 住 居 跡 出 土 遺 物 実 測 図



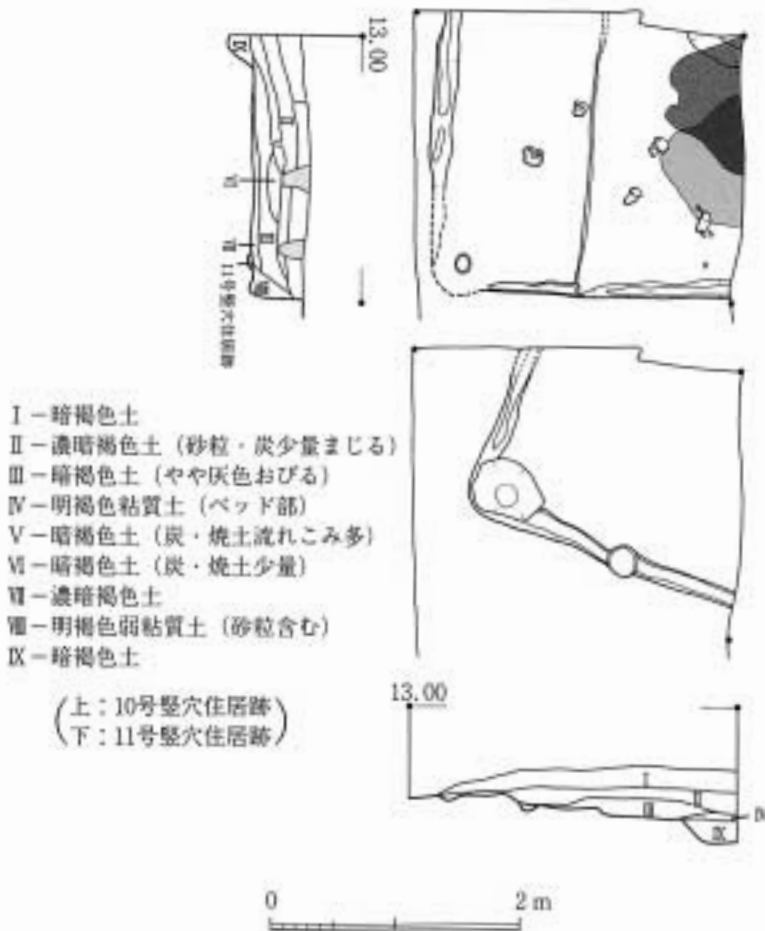
第 22 図 9 号 豎 穴 住 居 跡 炭 化 物 ・ 焼 土 分 布 図



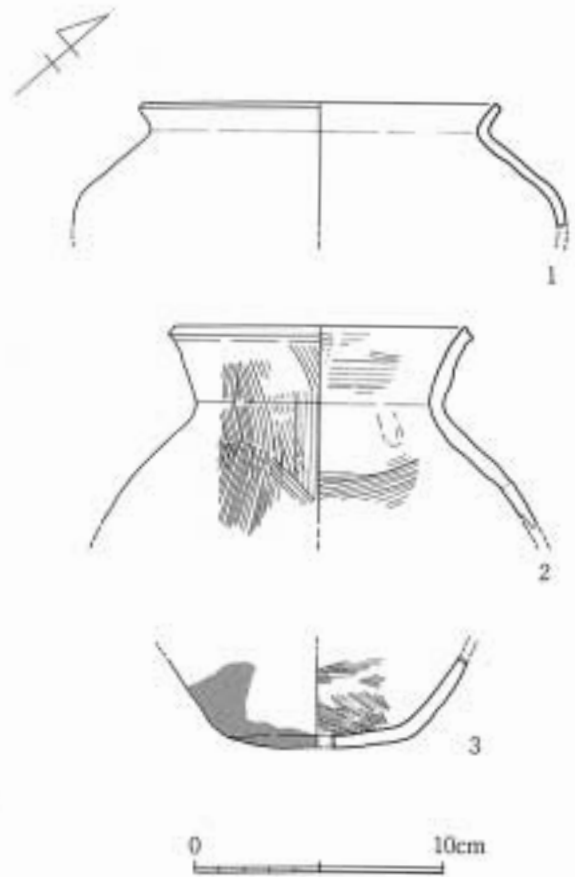
第 23 図 9 号 豎 穴 住 居 跡 実 測 図



第 24 図 9 号 豎 穴 住 居 跡 出 土 遺 物 実 測 図



第25図 10・11号竪穴住居跡実測図



第26図 10号竪穴住居跡出土遺物実測図

積を2号竪穴住居跡と比較してみると、この溝のさらに東側にベッド状遺構が続く可能性もある。中央ピットはおおよそ径50cm×深さ5cmの不整円形で、炭化物及び焼土を多量に含む極暗褐色土を埋土とする。貯蔵穴はおおよそ径63cm×深さ24cmの不整円形で、炭化物を含む暗褐色土を埋土とする。

4号竪穴住居跡の上層部は攪乱を受けており、残存する覆土の厚みが10cmと浅いことから、遺物は一括して扱った。1～5は甕である。1は全体的に磨滅するが、内外面に縦方向のハケメ調整が残る。2は磨滅が激しいため調整は不明である。3は不定方向のハケメ調整が残る。口縁端部は欠損する。4・5は脚である。4は接合面が観察でき、5は磨滅するが一部ハケメ調整が残る。6・7は鉢である。7はピットから出土したものである。8は今回の出土遺物の中では比較的大型の壺で、頸部に突帯がめぐる。9は壺の底部と思われる。底面は若干凸状を

呈し、外面は縦方向のハケメが残る。10～13は壺である。10は内面の頸部直下に持ち上げ痕らしき圧痕がある。11・12はともに口縁が真っ直ぐ立ち上がる。11の胴部内面には縦方向の指で痕が観察でき、12の下部には接合面が見られる。13は鉢の底部と思われる。丸底で外面に黒斑があり、内底面に指頭圧痕がある。14～17は高坏である。14・15は坏部である。14は磨滅のため調整は不明であるが、脚部との接合部が観察できる。15も同じく磨滅のため調整は不明である。16は脚柱で、裾部は欠損する。上部に接合面が観察でき、内面上部はスズ状の黒色がつく。17は脚台である。上部に接合面がある。中央に外面上方から内面下方に向けて、穿孔が2つ並んでいるが、4方向につくものかどうかは不明である。

4号竪穴住居跡は表土はぎの時点から多量の土器が出土しており、今回の調査においても最も多くの土器が出土した住居跡である。器種も多用であり破

第1節 弥生時代の遺構と遺物

片が多いことから出土した土器の大半は廃棄されたものと思われる。

5号竪穴住居跡（第15・16図）

調査区のほぼ中央に位置する。南側は床面積の約半分が削平され、西側は調査区外にかかる。上部も攪乱を受け、北側上部は4号竪穴住居にきられる。平面形式は長方形になると思われる。残存する壁高は約10cmで、支柱本数は2本と思われる。

ベッド状遺構および溝状遺構の有無は不明である。中央ピットはおよそ径70cm×深さ5cmで、平面形態は不明である。埋土は極暗褐色土で、炭化物・焼土を含む。貯蔵穴の有無は不明である。

1は床直出土の鉢である。磨滅が激しく、2mm前後の砂粒が全体に浮く。外面の一部に黒斑が認められる。

6号竪穴住居跡（第17・18図）

調査区の北西部に位置する。東側と上部は攪乱を受け、床面の大部分は調査区外にかかるため規模は不明である。平面形式は方形または長方形で、残存する壁高は約10cmである。支柱本数は不明である。

ベッド状遺構、中央ピットおよび貯蔵穴の有無は不明である。溝状遺構は壁に沿って検出された。幅は約20cm、深さは約5cmである。

1は1層から出土した甕の口縁部である。磨滅が激しいため調整は不明であるが、形状や胎土の様子から、他の住居跡出土土器と同時期のものと思われる。他に甕の脚部や高坏などの土器片が出土している。

7号竪穴住居跡（第19図）

調査区の北西隅に位置する。大部分が調査区外にかかるため規模は不明である。住居内の一部は6号竪穴住居にきられる。平面形式は方形または長方形になると思われる。残存する壁高は約40cmで、支柱本数は不明である。

ベッド状遺構、中央ピットおよび貯蔵穴の有無は不明である。溝状遺構は壁に沿って検出された。幅は約10cm、深さは約2～7cmである。

数点の土器片が出土したがいずれも小片で図化にはいたらなかった。

8号竪穴住居跡（第20・21図）

調査区の南西部に位置する。北西部は調査区外にかかり、南西部は攪乱を受ける。また南側上層部は溝（第3章第3節）にきられる。平面形式は長方形で、短辺に沿って両側にベッド状遺構が配される。残存する壁高は約30cm、床面とベッド部の比高差は約16～20cmである。支柱本数は2本と思われる。

ベッド部は粗掘りした後盛り土で成形される。溝状遺構は南西から南東にかけてL字状に床面とベッド部の境に配され貯蔵穴と接する。深さは約3～7cmである。中央ピットはおよそ径77cm×深さ11cmの円形である。貯蔵穴は長径82cm×短径65cm×深さ16cmの楕円形で南東壁に接する。ともに埋土は暗褐色土で、炭化物・焼土を含む。

1～8は床直出土の土器である。1は甕の口縁部から胴部にかけての破片であるが、磨滅が激しいため調整は不明である。2も同じく甕の口縁部である。比較的器壁が薄く、外面にタタキ痕が残る。3は甕の底部で脚端部は欠損する。磨滅しているが内面にハケメ調整がうすく残る。4は甕の脚台である。上部に接合面が観察できる。5・6は鉢である。6は、色調は他の土器と変わらないが、焼成は良好で胎土は土師器のようなきめ細かさがある。磨滅しているが、うすくハケメ調整の痕跡が確認できる。7は壺の口縁部である。8は高坏の脚柱である。坏部との接合部で、上部に接合面が観察される。9・10は1層出土の土器である。9は壺で、肩部に円形浮文が2つ貼りついた胴部であるが、浮文が4面に付けられるのかどうかは不明である。10は甕の口縁部である。器壁が比較的薄く、外面にタタキ痕が認められる。11は2層出土の高坏口縁部である。12・13は3層出土の土器である。12は鉢形土器の口縁部で、13は壺の底部と思われる。他の住居跡と比べると遺物の出土量は多く、頸部に突帯を持つ壺の一部などを含めおよそコンテナ5箱分の遺物が出土した。なお、床面から浮いた状態で、石皿が1点出土している。

9号竪穴住居跡（第22・23・24図）

調査区の南西部に位置する。西側は8号竪穴住居に、南側上層部は溝にきられる。平面形式は長方形と思われ、北壁に沿ってベッド状遺構が配されるが南側は不明である。残存する壁高は約36cm、床面とベッド部の比高差は約15～20cmである。支柱本数は不明である。

ベッド部は地山を掘りこんで造られ、東隅のおよそ1m四方を残して段がつくように設置される。溝状遺構は南東壁に沿って配され、貯蔵穴より先（東方向）には続かない。深さは約2～4cmである。中央ピットの有無は不明である。貯蔵穴は長径84cm×短径50cm×深さ18cmの楕円形で、貯蔵穴に近い南東壁は半円状に突出する。埋土は極暗褐色土で、炭化物・焼土を含む。

9号竪穴住居跡では表土はぎを終え掘り下げにかかった直後から多量の炭化物が出土し始めた。部分的には炭塊も確認でき、炭化物・焼土が住居内の広範囲にわたって確認されたため焼失家屋と推察したが、建築部材の単位などは復元できなかった。

1は床直で出土したジョッキ型土器の把手である。体部は見つかっていない。2号住居跡から出土したものとは異なり、成形は荒削りで胎土・焼成等は他の土器と同様である。2はトレンチから出土した甕の脚台である。調整は磨滅により不明であるが、端部に黒斑が残る。3は3層から出土した鉢である。特に下部の磨滅が激しい。口縁部の一部に黒斑がある。9号竪穴住居跡からはコンテナ1箱分の土器片が出土したがほとんどが胴部片であり、図化できるものは少なかった。

10号竪穴住居跡（第25・26図）

調査区の南西部に位置する。床面積の大部分は調査区外にかかるため、規模は不明である。また、上部は溝にきられる。平面形式は方形または長方形と思われ、南壁に沿ってベッド状遺構が配される。残存する壁高は約40cm、床面とベッド部の比高差は約8～18cmである。支柱本数は不明である。

ベッド部は地山を掘りこんで成形される。溝状遺構は壁に沿って設置され幅約10～15cm、深さ約2

～4cmである。中央ピット、貯蔵穴の有無は不明であるが、遺構内北隅でピット状のくぼみを検出している。その東側に、調査区外に広がるかたちで炭化物が広がる箇所が確認された。床面からは10cmほど浮いた状態である。またその下に床面が赤く変色した箇所（地山は灰白色粘質土）が同様に広がっていたが、範囲は微妙に異なる。炭化物は流れ込みに寄るものと思われる。

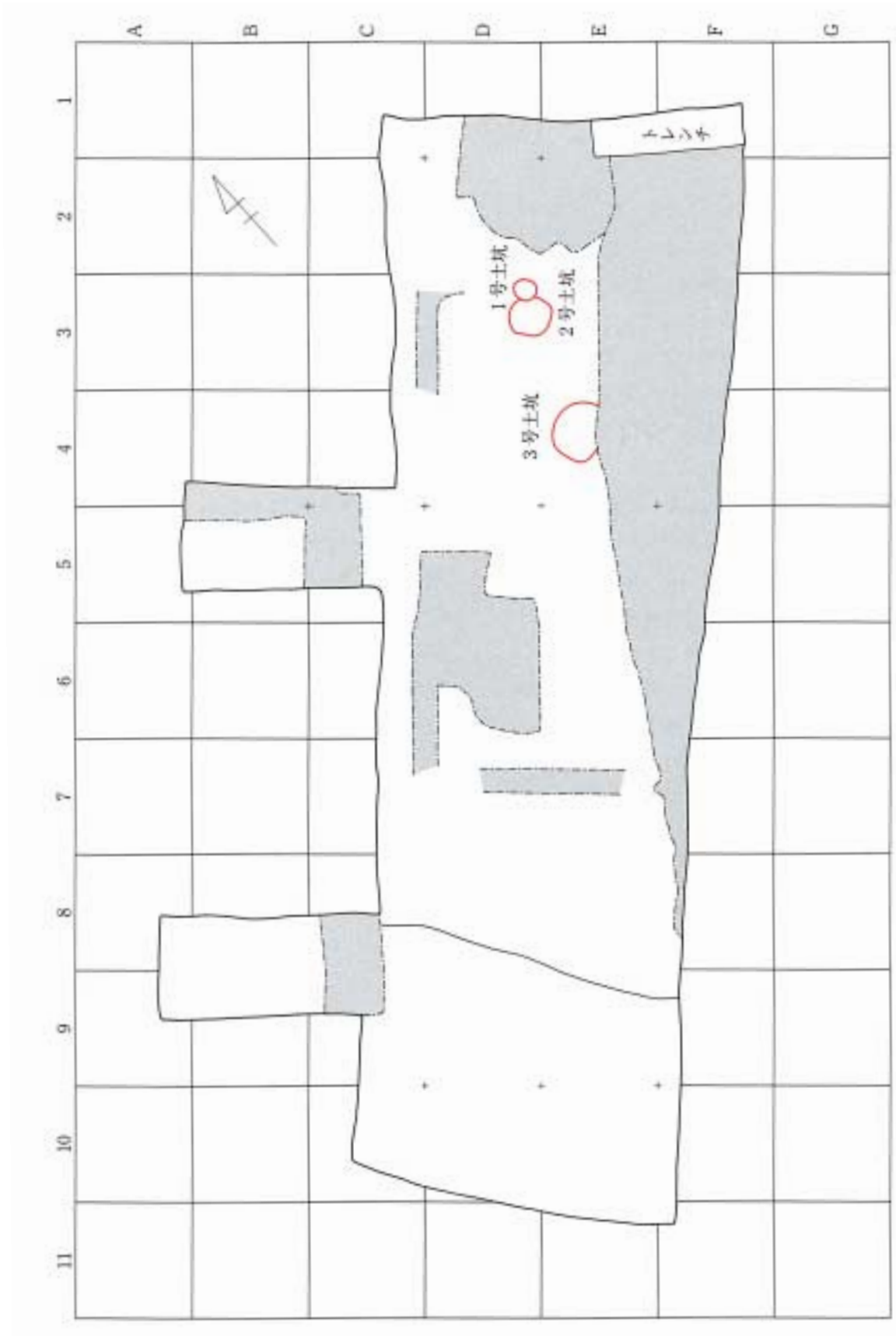
1～3は床直で出土したものである。1は鉢の口縁部で、赤褐色を呈し、もろくて崩れやすい。2は壺の口縁部で、頸下内面に持ち手のあとと見られる指頭圧痕がある。3は壺の底部である。胎土・色調は2の口縁部と似る。外面に一部黒斑がある。

11号竪穴住居跡（第25図）

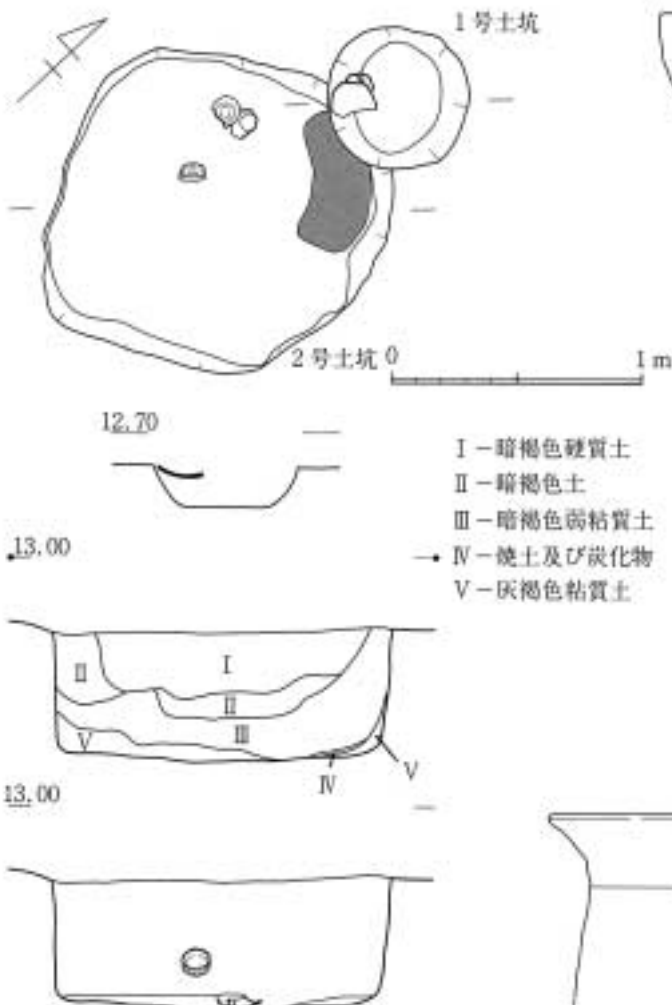
調査区の南西部に位置する。大部分は調査区外にかかり、上部は10号竪穴住居にきられているため規模は不明である。床面は削平され残っていないが、溝状遺構とピットはかろうじて確認できる。平面形式は方形または長方形で、ベッド状遺構の有無は不明であるが、遺構の西辺から1mほどの距離に、辺に平行して溝のような痕跡がわずかに認められたことからベッド部があった可能性もある。支柱本数は不明である。

溝状遺構は幅8～16cm深さ1～3cmである。中央ピット・貯蔵穴の有無は不明であるが、南隅に径およそ55cmのピットがある。

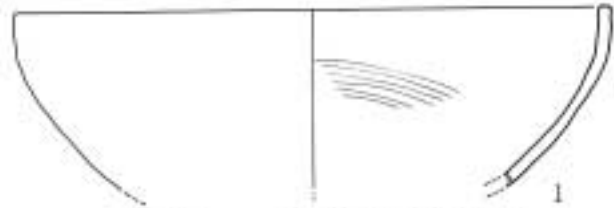
土器片が1、2点出土したがいずれも磨滅していた。



第 27 図 土坑全体配置図



第28図 1・2号土坑実測図



第29図 1号土坑出土遺物実測図



1



2



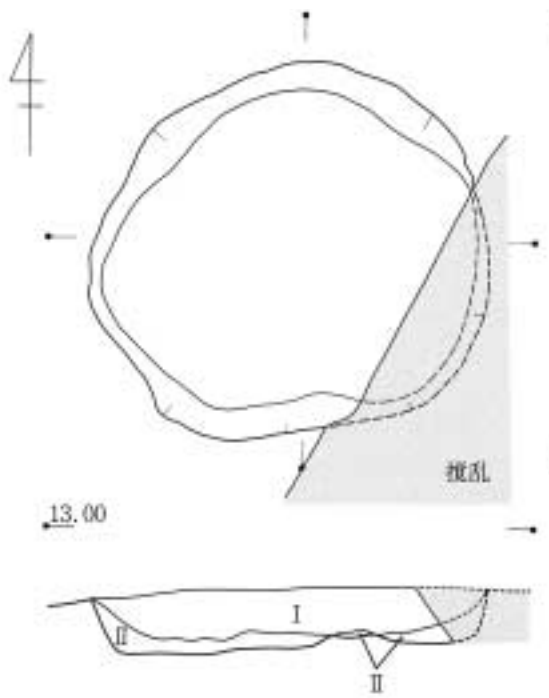
3



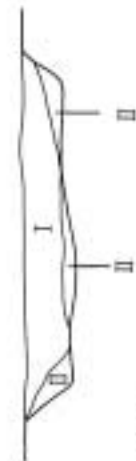
4



第30図 2号土坑出土遺物実測図



第 31 図



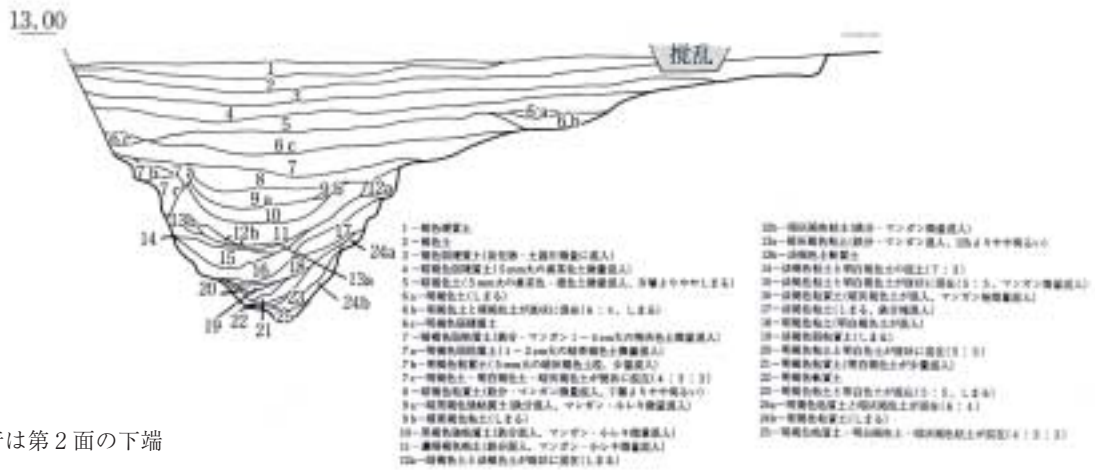
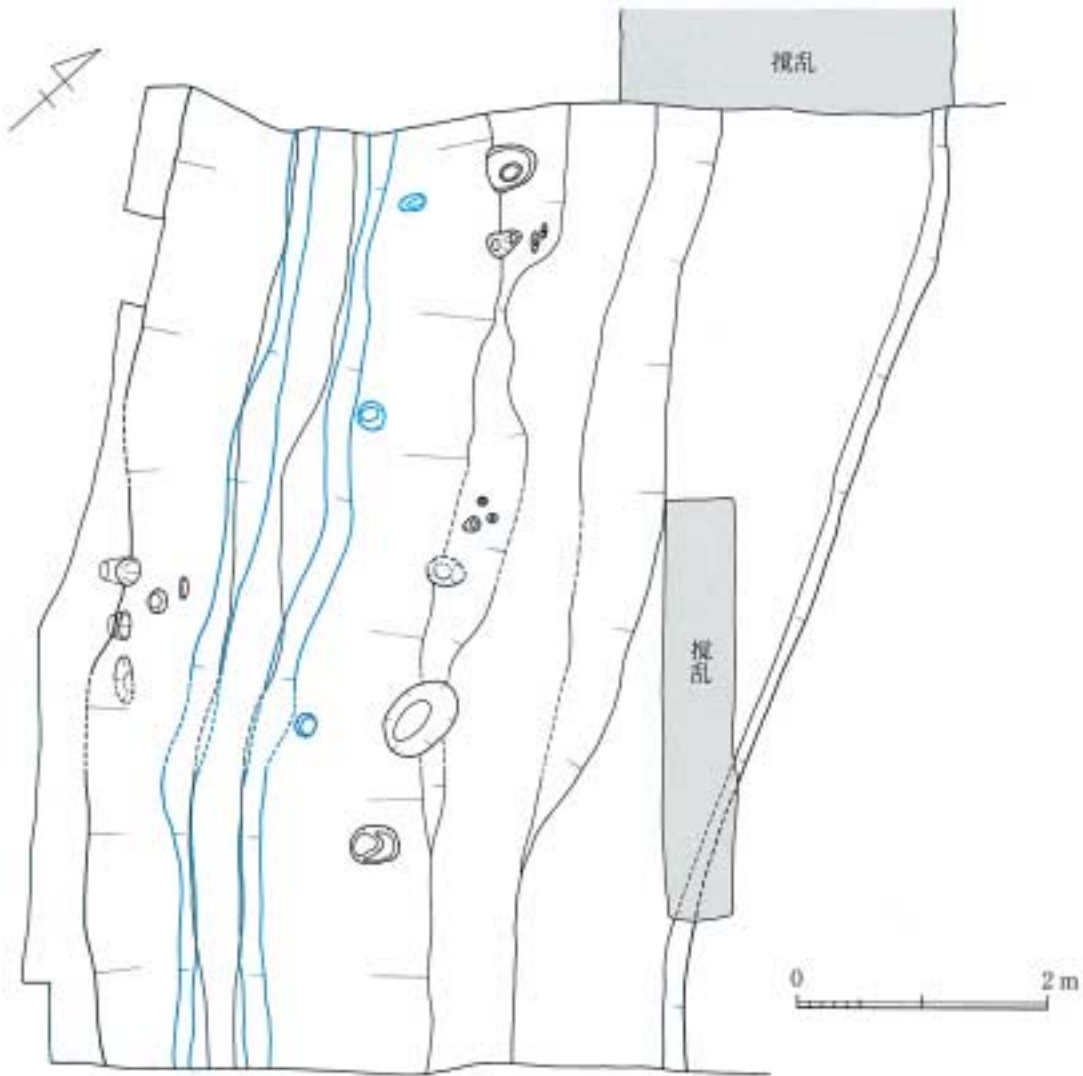
I - 暗褐色硬質土 (炭化物・焼土微量混入)
II - 暗褐色弱粘質土



3号土坑実測図



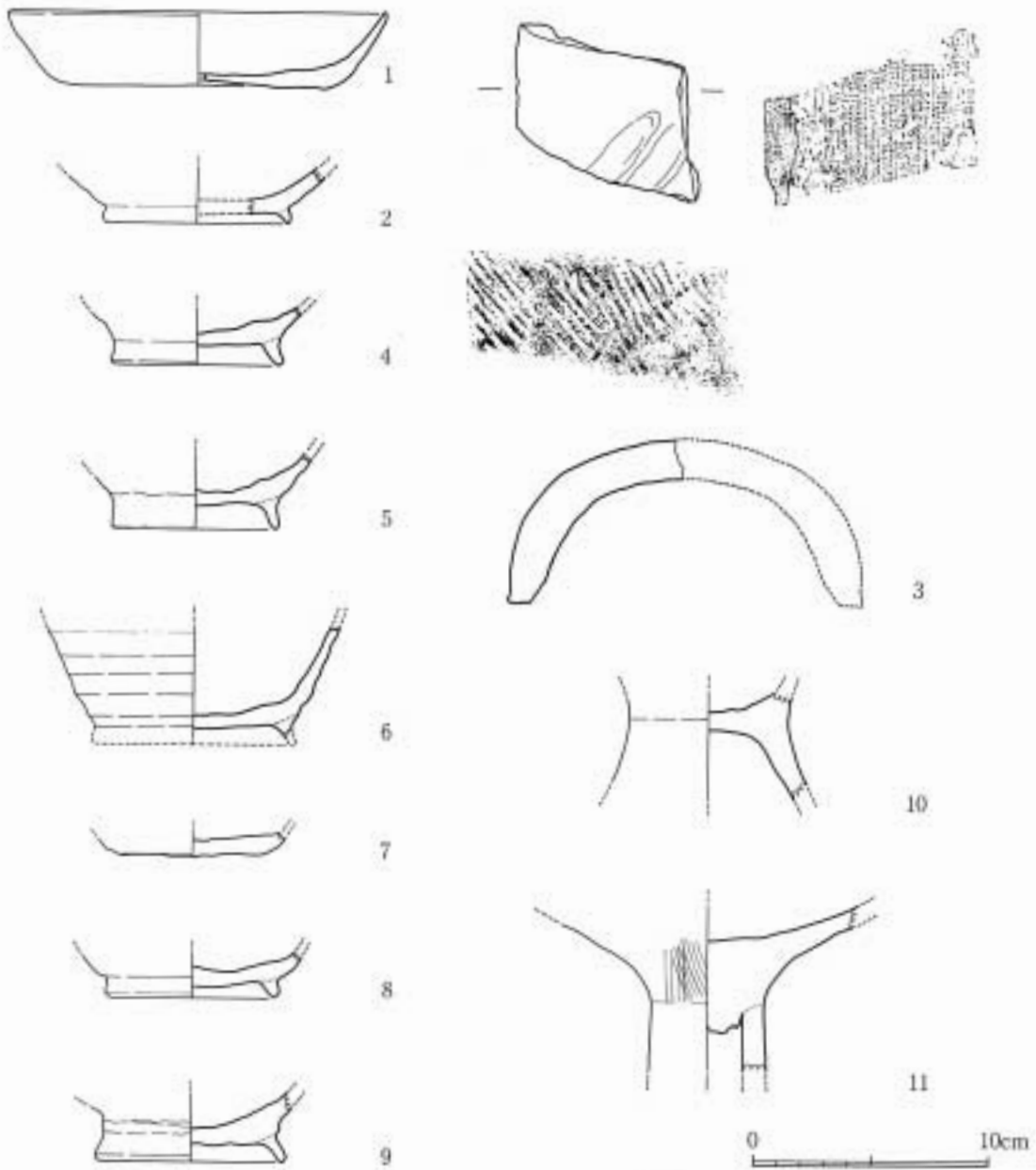
第 32 図 溝・不明遺構・ピット全体配置図



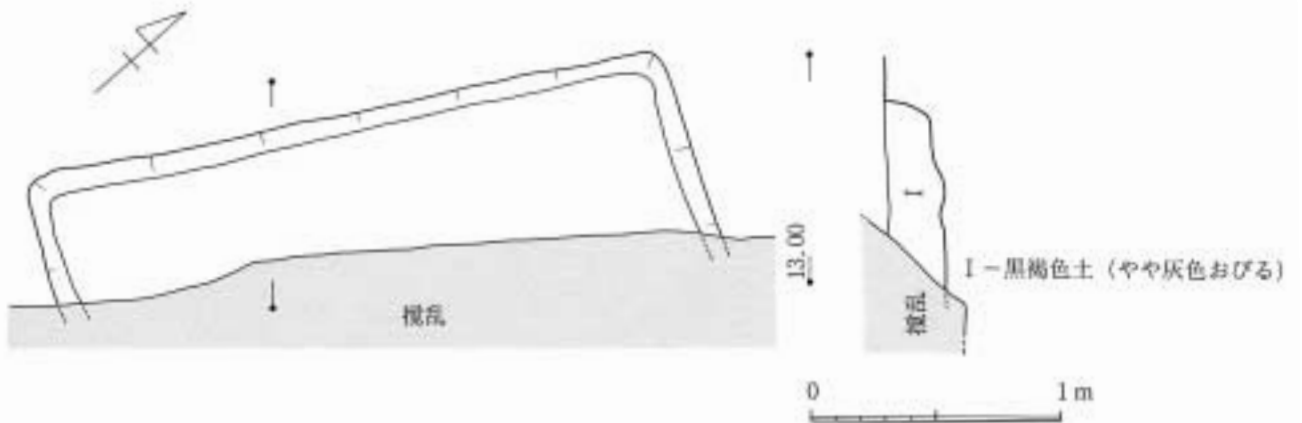
※青は第2面の下端

第 33 図 溝 実 測 図

第3節 その他の遺構と遺物



第34図 溝出土遺物実測図



第35図 不明遺構実測図

第2節 古代の遺構と遺物

古代の遺構として、土坑3基を検出した。古代の遺物を伴っていないものでも、検出状況から時期を判断したものも含めている。

1号土坑（第28図）

調査区北東部に位置する。平面形式は円形で、およそ径57cm×深さ17cmである。埋土は極暗褐色粘質土で5mm前後のレキを含む。

1は遺構の検出と同時に出土したもので、鉢の口縁部である。1号土坑は2号土坑をきっており、2号土坑は古代の遺物を伴うことから1号土坑はそれ以降の時代となる。しかし1は弥生時代の土器と思われるため、1号土坑に伴うものではないが参考資料として図化することにした。そのほか同じく弥生時代のものと思われる壺の胴部片も少量出土している。

2号土坑（第28図）

調査区北東部に位置する。北側上部は1号土坑にきられる。平面形式は円形で、およそ径130cm×深さ56cmである。土坑はほぼ垂直に掘りこまれ、埋土は暗褐色土を主とする。最下層の北東部には炭化物と焼土が集中する。

1・2は最下層から出土した須恵器坏である。ともに破損（欠損）した状態で出土した。軟質で磨滅が激しい。2は右回りの回転ロクロによる成形である。3は3層から出土した須恵器鉢である。1・2と異なり、硬質で焼成は良好である。左回りのロクロ成形・回転ヘラ切りで、口縁付近は焼成時の被熱によりゆがみが生じている。部分的に自然釉がかかり、全体的に赤みのある発色となっている。4は1層から出土した甕である。流れ込みによるものと思われる。磨滅が激しく調整は不明である。

3号土坑（第31図）

調査区やや東よりに位置する。上部および南東部は削平される。平面形式は円形で、およそ径

155cm×深さ25cmである。埋土は暗褐色土を主とし、2層に分けられる。遺物は流れ込みによる弥生土器が数点出土したもの、土師器や須恵器等は出土しなかった。しかし、弥生時代の遺構である2号堅穴住居跡をきっていることと、形態が2号土坑と類似することから2号土坑と同じく古代の遺構としてとりあつかったものである。

第3節 その他の遺構と遺物

1 溝について（第33・34図）

調査区の南辺に沿って溝が検出された。主軸はほぼ北西—南東にのる。検出時の幅は調査区壁から約6.2mをはかった。遺物の出土状況等から2面に分けられる。

第1面

南西部が調査区外にかかるため幅は不明であるが、傾斜から推測する幅は7mを越える。深さと幅を比べると、浅く幅広の様相を呈する。上部は褐色土、下部は暗褐色土を主とし、下層は少量の炭化物を含む。上層から中層にかけては弥生土器のほか土師器、須恵器、青磁などが含まれ、下層では土師器や須恵器の出土が多くなる。検出面からの深さ約1.5mのところ須恵器を主とする数点の遺物が点々と出土し、その面を溝の底面と判断した。

1・2は9層から出土した土師器の坏である。1は磨滅が激しく、調整は不明である。2は坏の底部で、外面と高台内面の横ナデがわずかに観察できる。3～11は10～11層から出土したものである。3～8は11層から出土した土師器の坏の底部である。磨滅しているが全てヘラ切り痕が観察される。5は体部から底部に至る部位であるが口縁・高台端部を欠損する。9は丸瓦である。外面は平行タタキ文、内面は布目痕が残る。内面端部は面取りされる。10・11は弥生土器である。10は内面に指頭圧痕のある甕の脚台である。端部は欠損する。11は高坏の坏部と脚柱の接合部である。外面のハケメ調整がうすく残る。なお、上層から石碓が1点出土している。

第2面

第1面の完掘後、確認のためにトレンチ（試掘坑）を入れてみたところ、堆積土が下方へV字状に存在することがわかった。検出面から底面までの深さは約2mである。上部は溝の第1面にきられる形となっており、第1面と第2面の接点に屈曲部がある。最下部から屈曲部までの角度は約60度、屈曲部から溝の端までの角度は約15度である。角度を考慮すると、本来の幅は4m前後かそれ以上になるものと推測される。水平堆積する第1面とは異なり、粘性の強い層とシルト質の層が交互に堆積する様相を見せる。遺物は1点も出土しなかった。

2 ピット状遺構について（第32図）

第2節で述べた土坑を検出した面と同じ面でピットを検出した。規則的な配列は明確でないため、ピット状遺構として一括して掲載することにしたものである。

うち1基のピットから弥生時代の甕の脚台が出土したが、住居跡出土遺物と同等の時期の土器と見られることからピットの掘削に伴う落ち込みの土器と判断した。

土坑との切り合いは不明だが、弥生時代の住居跡をきっていること、前述の中世の遺物を含む溝の上にはピットは存在しないこと、また包含層中にも古墳時代の遺物は含まれないことなどから、ピット状遺構の時期はおよそ古代と推測される。

3 不明遺構について（第35図）

2号住居跡のほぼ中央上面におさまる。北側を2号土坑にきられる。平面形式は方形で、長軸262cm×短軸52cm×深さ21cmを測る。当初2号住居の堆積土と認識していたが、平・断面の様相から遺構と判断した。

遺物は数点出土したが、いずれも磨滅した弥生土器片であった。時期は不明である。

第 2 表 平嶋遺跡竪穴住居跡一覽表

掲載 番号	実測時 の番号	平面形式	床面積の 残存率(%)	主軸の方位	床面の標高 (m)	支柱穴の有無	法量 (m)		壁高	付帯施設			備 考
							長軸	短軸		ベッド	中央ピット	貯蔵穴	
1号	S003	方形または 長方形	—	N-40°-E	12.53	不明	2.43~	0.52~	(0.03)	不明	不明	不明	上部は大幅に削平を受ける。また遺構の大部分が調査区外にかかる。
2号	S042	長方形	97	N-38°-E	12.39	2本柱	5.86	3.78	0.30	あり	あり	あり	・東側ベッド部の北隅および西側ベッド部の中央付近に炭化物の集中箇所あり。
3号	S082	方形または 長方形	36	N-84°-E N-6°-W	12.53	不明	6.00~	5.00~	(0.23)	あり	不明	不明	・上部は大幅に削平を受ける。遺構の南側は2号住居、東側は攪乱のため検出不能。
4号	S057	方形または 長方形	50	N-24°-E	12.65	不明	4.70	3.16~	(0.10)	あり	あり	あり	・上部は大幅に削平を受ける。 ・土器が大量に出土。廃棄されたものか？
5号	S087	方形または 長方形	36	N-46°-E	12.60	2本柱	5.16	3.56~	(0.10)	不明	あり	不明	・上部は大幅に削平を受ける。また遺構の北～西、南の部分は攪乱により破壊される。
6号	S043	方形または 長方形	—	N-38°-E N-52°-W	12.55	不明	2.00~	1.20~	(0.10)	不明	不明	あり？	・大部分が調査区外にかかる。
7号	S045	方形または 長方形	—	N-74°-E N-16°-W	12.22	不明	2.10~	0.96~	(0.15)	不明	不明	あり	・調査区北壁付近にかかる突出部は9号住居のものと同種のものか？
8号	S044	長方形	76	N-48°-E	12.25	2本柱？	5.52	3.00~	0.35	あり	あり	あり	・ベッド部は東西とも盛土で成形される。
9号	S048	方形または 長方形	19	N-30°-E	12.53	不明	5.53~	3.00~	0.37	不明	不明	あり	・南壁の中央付近に半円状の突出部あり。 ・焼失家屋の可能性あり。
10号	S047	方形または 長方形	23	N-48°-E	12.12	不明	2.52~	2.28~	0.42	不明	不明	不明	・炭化物・焼土が検出されたが範囲は異なる。炭化物は若干浮いた状態で出土。
11号	S059	方形または 長方形	20	N-27°-E N-63°-W	12.22~	不明	2.16~	1.82~	不明	不明	不明	不明	・溝状遺構のみ残存。上部は10号住居により削平される。

(註) 1 「床面積の残存率」については、中央ピットの位置やベッド状遺構の残存の様子などから大まかに推定面積を算出し、計算した。
 2 「主軸の方位」は基本的に中央ピットと貯蔵穴を結んだ線を用いて計測したが、向きを判断しかねるものについては2つ記載することとした。
 3 「床面の標高」および「法量」については、'・'となっているのはその直前の数字が残存する値であることを示す。
 4 「付帯施設」については、「ベッド」、「中央ピット」、「貯蔵穴」および「溝」は以下の意味で使用している。

- 「ベッド」＝「ベッド状遺構」 竪穴側壁面に沿って、床面より一段高く造る土壇状の遺構。
- 「貯蔵穴」 竪穴壁面に接して設ける穴について便宜上用いている。ただし貯蔵の機能があつたものかどうかは断言できない。
- 「中央ピット」 床面の中央にある（と思われる）穴。炭化物や焼土を含むが床面の焼けた痕跡はない。
- 「溝」＝「溝状遺構」 床面の乾燥を保つための溝と思われる。

(参考) 宮本長二郎「日本原始古代の住居建築」中央公論美術出版、平成8年

第3節 その他の遺構と遺物

第3表 平嶋遺跡報告書掲載土器観察表

掲載番号	調査区名	遺構番号	出土状態	時代	種別	部位	残存率	反転復元	法量			調整			胎土		色調	焼成	備考	
									口径	底径	器高	最大径	内面	外面	見込み	底部				赤色酸化粒
8-1	D4	2号住居	床直	弥生	甕	頸部-体	-	○	(18.8)	-	8.5~	(19.2)	ナデ?	横ナデ?	横ナデ?	△	△	◎	やや不良	体部に黒斑アリ。
8-2	E4	2号住居	床直	弥生	甕	脚台	-	○	(13.8)	5.3~	-	-	不明	不明	不明	△	◎	◎	良好	
8-3	E4	2号住居	ピット1	弥生	高坏	脚部	-	○	(17.4)	4.0~	-	-	不明	不明	不明	△	◎	◎	良好	
8-4	B5	2号住居	床直	弥生	高坏	口縁部	-	○	(31.4)	4.2~	(31.6)	不明	不明	不明	不明	△	○	○	やや不良	
8-5	E3	2号住居	1層	弥生	小壺	口縁部	-	○	(8.2)	3.3~	-	ナデ	ナデ	ナデ	△	○	△	明赤褐色	やや不良	
8-6	E4	2号住居	1層	弥生	高坏	口縁部	-	-	不明	3.5~	-	ハケメのち	ハケメのち	横ナデ	△	○	△	にぶい黄褐色	床直出土遺物と同形	
8-7	E5	2号住居	2層	弥生	甕	脚台	-	-	-	4.5~	-	不明	不明	不明	△	◎	◎	◎	やや不良	
8-8	E4	2号住居	一括	弥生	ジョッキ型土器	底部	-	○	(7.4)	2.3~	-	横ナデ	ナデ?	不明	△	△	◎	◎	良好	
8-9	D3	2号住居	一括	弥生	甕	口縁部	-	○	(21.4)	2.8~	-	不明	横ナデ	不明	△	△	◎	◎	やや不良	
8-10	D3,4	2号住居	一括	弥生	甕	口縁部	-	○	(20.8)	7.0~	-	不明	不明	不明	○	○	○	◎	やや不良	
10-1	E2	3号住居	一括	弥生	甕	口縁部	-	-	不明	4.1~	-	不明	横ナデ	不明	△	◎	◎	◎	やや不良	
10-2	E3	3号住居	3層	弥生	甕	脚台	-	-	-	5.5~	-	ハケメ?	ナデ?	不明	△	◎	◎	◎	やや不良	
13-1	D5	4号住居	下層	弥生	甕	口縁-体	1/3	○	(15.6)	20.4~	(21.2)	ハケメ(左縦方向下がり)	ハケメ	不明	△	△	◎	◎	やや不良	
13-2	C5	4号住居	下層	弥生	甕	口縁部	-	○	(20.7)	7.7~	-	不明	不明	不明	△	◎	◎	◎	やや不良	
13-3	C5	4号住居	下層	弥生	甕	体部	1/5	○	-	18.6~	(23.6)	不定方向ハケメ	縦方向ハケメ	不明	△	◎	◎	◎	やや不良	部分的に磨滅する。
13-4	D5	4号住居	下層	弥生	鉢	脚台	-	×	10.4	5.2~	-	横ナデ	横ナデ	不明	◎	◎	◎	◎	良好	
13-5	C5	4号住居	下層	弥生	鉢、甕?	底部-脚	1/3	×	13.2	10.7~	-	ハケメ	ハケメ	ナデ	◎	◎	◎	◎	良好	
13-6	C5	4号住居	下層	弥生	壺	口縁部	-	○	(13.6)	5.0~	-	不明	不明	不明	△	△	◎	◎	やや不良	断面は明黄褐色。
13-7	C5	4号住居	ピット2	弥生	壺	口縁-体	-	-	不明	7.3~	-	不明	不明	不明	△	△	◎	◎	やや不良	
13-8	C4,5	4号住居	下層	弥生	壺	口縁部	1/3	×	21.8	(10.1)	-	ナデ?	ナデ?	不明	◎	◎	◎	◎	良好	長頸素口縁部。頸部に突帯がつく。刻み目はない。
13-9	C5	4号住居	下層	弥生	鉢、甕、壺?	底部	-	△	-	6.6	4.4~	ナデ	縦方向ハケメ	ナデ	◎	◎	◎	◎	良好	
13-10	C5	4号住居	下層	弥生	小壺	口縁部	-	×	8.4	5.0~	-	不明	不明	不明	△	△	◎	◎	やや不良	
13-11	D5	4号住居	下層	弥生	小壺	体部	-	-	-	7.7~	不明	ナデ	ハケメのち	不明	◎	◎	◎	◎	良好	外面に黒斑あり。
13-12	C5	4号住居	下層	弥生	小壺	口縁-体	1/5	○	(10.0)	10.9~	(14.8)	ナデ	ナデ	不明	○	○	△	△	やや不良	口縁部にうすくハケメ残る。ただし最終調整ではない。
13-13	C5	4号住居	下層	弥生	鉢	底部	1/3	×	-	2.6(丸)	4.1~	ナデ	縦方向ハケメ	ナデ	◎	◎	◎	◎	良好	外面に黒斑あり。
14-14	C4	4号住居	床直	弥生	高坏	口縁部	-	○	(28.8)	5.1~	(29.2)	不明	不明	不明	△	◎	◎	◎	やや不良	
14-15	C4	4号住居	下層	弥生	高坏	坏部	1/2	△	(31.4)	8.5~	(31.6)	不明	不明	不明	○	○	△	△	やや不良	
14-16	C4	4号住居	下層	弥生	高坏	脚柱	1/3	×	-	12.3~	-	横ナデ	不明	不明	△	△	◎	◎	良好	

14-17	C 4	4号住居	下層	弥生	高環、鉢?	脚台	-	△	-	(12.2)	9.8~	-	縦方向 ハケス	縦方向 ハケス	-	-	×	○	○	明黄褐色 10YR7/6	斜め上方から穿孔2個。四方に着くものとおもわれるが、90度の軸はすれる。内面にシボアリ。
16-1	C 6	5号土坑	床直	弥生	鉢	口縁~底	完形	×	9.4	0.8(丸)	5.0	9.6	不明	不明	-	-	×	△	◎	黄褐色 7.5YR6/6	外面に黒斑あり。
18-1	E 3	6号住居	1層	弥生	甕	口縁部	-	-	不明	-	2.6~	-	不明	不明	-	-	×	○	○	やや不良 10YR6/4	
21-1	D 8	8号住居	床直	弥生	甕	上半部	1/2	○	(17.2)	-	11.7~	(19.4)	不明	不明	-	-	×	◎	◎	黄褐色 7.5YR8/8	
21-2	C 8	8号住居	床直	弥生	甕	口縁部	-	○	(19.0)	-	8.6~	-	ナデ	タタキ	-	-	△	△	◎	黄褐色 7.5YR6/6	弥生後期後半長胴甕。
21-3	D 8	8号住居	床直	弥生	甕	下半部	1/3	×	-	不明	11.8~	不明	ハケス?	縦方向 ハケス?	ナデ?	ナデ?	△	△	◎	黄褐色 7.5YR8/8	
21-4	C 8	8号住居	床直	弥生	甕	脚	-	○	(10.8)	-	4.3~	-	不明	不明	-	-	×	◎	◎	明黄褐色 10YR7/6	剥離面あり。
21-5	D 8	8号住居	床直	弥生	鉢	口縁~体	-	-	不明	-	7.2~	不明	不明	不明	-	-	△	◎	◎	明赤褐色 5YR5/6	
21-6	D 8	8号住居	床直	弥生	小壺	口縁~体	3/4	○	(13.4)	-	9.2~	(15.2)	ハケス、 ナデ?	ハケス、 横ナデ?	-	-	◎	△	△	黄褐色 7.5YR7/6	胎土。色調は他の土器と変わらな いが、きめが細かく、まるで土師 器のようなかんじ。終末期
21-7	C 8	8号住居	床直	弥生	壺	口縁部	-	-	不明	-	2.6~	-	横ナデ?	横ナデ?	-	-	△	○	◎	黄褐色 7.5YR7/6	剥離面あり。
21-8	D 8	8号住居	床直	弥生	高坏	脚柱上部	-	○	-	-	4.2~	-	ナデ	縦方向 ハケス?	-	-	◎	△	△	黄褐色 7.5YR7/6	
21-9	C 8	8号住居	1層	弥生	甕	口縁部	-	-	不明	-	5.0~	-	ナデ?	ナデ?	-	-	×	○	◎	黄褐色 7.5YR6/6	
21-10	D 8	8号住居	1層	弥生	壺	体部	1/8	○	-	-	7.8~	(19.8)	不明	不明	-	-	△	◎	◎	黄褐色 7.5YR7/6	凹形浮文、2個貼りつけ。四方に 着くかどうかは不明。
21-11	C 8	8号住居	2層	弥生	高坏	口縁部	-	○	(26.4)	-	4.6~	(27.0)	ナデ?	ナデ?	-	-	△	◎	◎	明黄褐色 10YR7/6	
21-12	D 8	8号住居	3層	弥生	小壺	口縁~体	1/6	○	(16.0)	-	7.0~	(16.7)	不明	不明	-	-	×	△	△	明黄褐色 10YR6/6	
21-13	D 8	8号住居	3~4層	弥生	壺	底部 (丸)	-	×	-	1.6	2.2~	-	ナデ	ナデ	-	-	×	◎	◎	明黄褐色 10YR6/6	
24-1	D 8	9号住居	床直	弥生	ジョッキ型土器	把手	-	-	-	-	6.6~	-	-	工具による ナデ	-	-	×	△	◎	黄褐色 7.5YR6/6	部分的に磨滅する。
24-2	D 8	9号住居	トレンチ	弥生	甕	脚台底部	-	○	-	(10.6)	4.2~	-	不明	不明	-	-	×	◎	◎	黄褐色 7.5YR6/6	裾部に黒斑アリ。
24-3	D 8	9号住居	3層	弥生	鉢	口縁~体	-	○	(13.8)	-	5.8~	(15.2)	不明	不明	-	-	△	◎	◎	黄褐色 5YR6/6	口縁部に黒斑アリ。
26-1	B 8	10号住居	床直	弥生	小壺	口縁~体	-	○	(14.2)	-	5.2~	(20.0)	不明	不明	-	-	×	◎	◎	赤褐色 2.5YR4/6	N59と同一個体か?
26-2	B 8	10号住居	床直	弥生	壺	口縁部	-	○	(11.6)	-	8.0~	-	横方向 ハケス	縦方向 ハケス	-	-	△	◎	◎	赤褐色 2.5YR4/6	口縁はやや内湾する。
26-3	B 8	10号住居	床直	弥生	小壺	底部	-	○	-	7.1	3.3~	-	ハケス	不明	ハケス	×	◎	◎	赤褐色 2.5YR4/6	黒斑アリ。	
29-1	D 3	1号土坑	上層	弥生	鉢、甕?	脚台底部	-	○	-	(10.2)	3.2~	-	不明	不明	-	-	×	◎	◎	黄褐色 7.5YR7/6	
30-1	D 3	2号土坑	床直	古代	須恵器坏	口縁~底	1/2	△	(12.4)	7.2	3.6	(12.6)	回転横ナデ	回転横ナデ	ヘラ切り	ヘラ切り	×	△	△	灰色 10Y6/1	長石が多く含まれる。右回転。
30-2	D 3	2号土坑	床直	古代	須恵器坏	口縁~底	4/5	×	12.6	8.6	4.0	12.8	回転横ナデ	回転横ナデ	ヘラ切り	ヘラ切り	×	△	△	灰白色 10Y7/1	
30-3	D 3	2号土坑	3層	古代	須恵器鉢	口縁~底	ほぼ完形	×	13.2	7.1	6.3	13.4	回転横ナデ	回転横ナデ	ヘラ切り	ヘラ切り	×	△	△	黄褐色 7.5YR6/3	口縁部一部欠損、左回り。玉名産。 金属屑混入。8c末~9c初(網 田) or 9c末~10c初(水野)
30-4	E 2	2号土坑	一括	古代	甕	口縁部	-	○	(24.0)	-	7.6~	-	不明	不明	-	-	△	◎	◎	黄褐色 10YR7/2	
34-1	E 10	溝	9層	古代	土師器坏	口縁~底	1/2	○	(15.9)	(10.9)	3.2	(16.2)	不明	不明	不明	不明	◎	△	△	黄褐色 7.5YR7/6	
34-2	D 9	溝	9層	古代	土師器坏	底部	-	○	-	(7.8)	2.4~	-	不明	横ナデ	-	横ナデ	△	○	◎	黄褐色 5YR6/6	
34-3	D 9	溝	11層	古代	土師器坏	底部	1/4	×	-	7.0	2.5~	-	横ナデ?	横ナデ?	ヘラ切り	ヘラ切り	△	△	◎	黄褐色 7.5YR7/6	高台高1.0、高台径7.4

第3節 その他の遺構と遺物

34-4	E 10	溝	11層	古代	土師器坏	底部	1/3	×	—	6.8	3.3~	—	横ナテ	横ナテ	指ナテ	ヘラ切り	◎	△	△	やや不良	にぶい黄澄 10YR7/4	高台高1.0、高台径7.2
34-5	D 9	溝	11層	古代	土師器坏	体部	1/3	△	不明	不明	4.9~	不明	横ナテ	横ナテ	指ナテ	ヘラ切り	○	△	△	やや不良	にぶい黄澄 10YR7/4	高台高1.0~、高台径8.6~
34-6	D 10	溝	11層	古代	土師器坏	底部	1/3	×	—	6.2	1.1~	—	—	—	指ナテ	ヘラ切り	×	△	◎	やや不良	にぶい黄澄 10YR7/4	
34-7	D 10	溝	11層	古代	土師器坏	底部	1/3	×	—	7.0	2.0	—	横ナテ	横ナテ	指ナテ	ヘラ切り	○	△	△	やや不良	澄 7.5YR7/6	高台高0.8、高台径7.4
34-8	D 10	溝	11層	古代	土師器坏	底部	1/3	△	—	7.8	3.0~	—	—	—	ナテ	ヘラ切り	△	△	◎	やや不良	澄 7.5YR7/6	高台高1.1、高台径8.2
34-9	D 10	溝	10層	古代	丸瓦	—	—	×	—	—	7.0~	—	布目痕	タタキ、指 頭圧痕あり	—	—	×	△	△	良好	灰 N6Y	内面端部斜めに切斷。
34-10	D 10	溝	11層	弥生	甕	脚台	—	○	—	不明	4.6~	—	横ナテ	ナテ	指頭圧痕 アリ	ナテ	◎	○	△	良好	澄 7.5YR7/6	
34-11	D 10	溝	11層	弥生	高坏	底部~脚	—	×	—	—	7.2~	—	不明	縦方向 ハケム	不明	—	×	◎	△	良好	澄 5YR6/6	

(註) 1. 「掲載番号」は棟図番号と土器に付した番号を組み合わせている。

2. 「反転復元」について、記号は以下の意味で使用している。

【○】…反転復元したもの

【△】…一部反転復元したもの

【×】…反転復元できないもの

【—】…反転復元しなくても復元できるもの

3. 「胎土」は混入の度合いが大きいものから順に◎・○・△・×としている。

第IV章 まとめ

平嶋遺跡では弥生時代の竪穴住居跡11棟と古代の土坑3基、弥生時代から中世にかけての溝と複数のピット状遺構、不明遺構1基を検出した。以下、遺跡の主な時代である弥生時代の遺構・遺物等について、まとめていきたいと思う。

1 出土土器と集落全体の時期について

本遺跡の南南東約6kmの場所に野部田遺跡（玉名郡天水町）がある。ここから出土した土器は野部田式土器と呼称され、弥生時代後期後半～終末期の標式土器となっている。

昭和26年の調査で出土したものに下前原遺跡（玉名郡岱明町）出土の土器をくわえたもので形式設定が行われた。また本遺跡と同じく菊池川流域（中流域）に所在する津袋大塚遺跡（鹿本郡鹿本町）から出土した土器はⅠ期とⅡ期に分けられ、Ⅱ期にまとめられた土器群が当該時期にあるとされている。いわゆる野部田式とされている弥生時代後期後半～終末期における土器の特徴は、次のようなものである。

甕—口縁部がくの字形に屈曲し、胴部は長く、底部に脚台がつく。器面は内外面ともにハケメで仕上げるが、タタキ痕が残るものもある。

鉢—脚台が付くものと付かないものがある。器面はナデ・ハケメで調整する。

壺—大型と小型がある。大型壺は細長い卵形をした胴部にラッパ状に開く口縁部がつく。胴部にタタキ痕が残る。内外面ともハケメ調整である。肩部に櫛描波状文や竹管文がつくこともある。小型壺は卵形をした胴部にくの字形の口縁部がついたものと、土師器の小型丸底埴のようなものがある。

高坏—坏部は浅く、脚柱から裾部にかけて広がり、口縁部は軽く立ちあがって開く。脚部には穴が穿たれる。器面はヘラみがきとハケメ仕上げがある。

器台—上部が開いた筒状。器面はハケメ仕上げで、

タタキ痕が残るものもある。

その他ジョッキ型土器やガラス型土器がある。

（以上参考文献による。）

今回の調査で出土した弥生土器の器種は甕・鉢・壺（大・小）・高坏・ジョッキ型土器である。完形で出土したものはなく、凶化は反転復元して行っているものが多い。破片で出土したものがほとんどだったため全体像が把握できたものはないが、口縁・裾端部の形状、残存部から推定される器形、最終調整などからみると、本遺跡の出土土器の様相はいわゆる野部田式土器とされているものの特徴に近似する。

それに先行する時期・後続の土器は出土しておらず、したがって本遺跡の住居跡から出土した土器はおおむね弥生時代後期後半と見ることができる。遺物がほとんど出土していない住居跡についても、遺構のきりあいや形状などから同時期のものと見て差し支えないと思われる。

2 土器の胎土の違いと住居の時期差について

土器の胎土を肉眼で観察するうち、3種類に大別できることがわかった。A—赤色（酸化）粒の粒が比較的大きく（1～3mm）混入の割合が高いもの、B—石英・長石の粒が比較的大きく（2、3mm）混入の割合が高いもの、C—砂粒が比較的細かく角閃石・雲母等が適度に混入するもの、の3種である。赤色粒はべんがら状を呈するものもあり、紙の上にこぼれおちた粒子をつぶすと赤い顔料のようになる。Aの赤色粒は粘土層に含まれる鉄分と見られ、B、Cに含まれる石英・長石、雲母・角閃石等は花崗岩を構成する鉱物である。第3章で実測した土器について、上記の3種類の胎土を住居ごとに示したのが第3表である。

これを見ると、胎土の差は器種の違いというよりも住居ごとに偏りがあることがわかる。Aは4号竪穴住居跡に圧倒的に多く、2号竪穴住居跡や8号竪穴住居跡の出土遺物には少量含まれる。Bは3号竪

穴住居跡や10号堅穴住居跡に見られるが、2号堅穴住居跡や8号堅穴住居跡ではBとCが混在している。また溝出土の土師器はAとCが半々になっており、赤色粒ではなく灰色を帯びた黒色粒を含む坏もある。

胎土を比較してみた場合、2号堅穴住居跡と8号堅穴住居跡はともにBとCの組み合わせである。2号堅穴住居跡にわずかにきられる4号堅穴住居跡は最もAの割合が高い住居跡であるが他の住居跡と比較すると土器の出土量自体が多い。その下に3号堅穴住居跡や9号堅穴住居跡などBを主体とする土器が出土する住居跡がある。ただし3号堅穴住居跡は上部を大幅に削平されているし9号堅穴住居跡は8号堅穴住居跡に大部分をきられているため検討のための十分な資料が呈示されているとは言えない。

前述の通り、出土土器の器形は弥生時代後期後半の一時期に収まるものである。土器の胎土の差異を微妙な住居時期差と仮定すれば、切り合い関係が面的に確認できる調査区中央部では次のような変遷を追うことができる。

1 2号・8号堅穴住居



2 4号堅穴住居



3 3号・5号・9号堅穴住居

これらは主軸の方位もあまり変わらない。3については5号堅穴住居跡と9号堅穴住居跡が近接しているためさらに一時期増える可能性もある。

ところで調査区の北方に玉名市菅山田団地が隣接しているが、建設時に弥生時代の甕棺が見つまっている。また調査区の北方を北東-南西方向に走る道路を建設したときには弥生時代の住居跡が見つまっている。最近では調査区の北東方向約500mのところでアパートを建設した際にベッド状遺構を伴う住居跡が確認されている。

以上のことから集落が北東～北～北西の方向、つまり台地の広がる方向に向かって展開していることは明らかである。また調査区の南西端で溝を検出しているが、住居跡群と同時期に築造されたものと考えられ、環濠である可能性が高い。環濠は一般的に防禦のためとも区画のためとも言われ、弥生時代を

通して見られる構築物である。本遺跡で検出した溝を環濠と仮定すると、一定の区画を完結する円で取り囲むのではなく、一部は斜面にぶつかる構造となるであろう。九州における弥生時代の環濠は後期後半の時期に属する集落に調査例が多く見られ、台地上に立地する例が多い。概して環濠の内部の規模は数十メートルから数百メートルの長さがあるが、今回の調査では溝と住居跡群との関係や集落の範囲等について明確にはできなかった。今後本遺跡近辺の調査例が増えるにつれ集落の様相も明らかになっていくと思われる。

3 溝について

溝は2面に分けられる。第1面の溝は弥生時代の住居跡をきっており、古代の特徴を持つ遺物が第1面の底面で点在しながら出土していることと、埋土に青磁が含まれることから、古代から中世にかけて埋没したものと思われる。第2面の溝はそれ以前のものとなるが、遺物を伴わないため築造時期は不明である。ただし包含層中に縄文時代や古墳時代等の遺物が含まれないことから弥生時代の溝である可能性が高い。

第2面の溝が機能を停止したあとは自然に土砂が堆積し、古代以後、より積極的に土地の高低差をなくしていったものかと思われる。

4 2号土坑の遺物について

土坑は全部で3基検出したが、時期を判断する材料となる遺物を伴うものは2号土坑のみである。遺物は須恵器3点であるが、中でも第28図の3は最も床面に近いものである。類例はほとんどないが、色調や形状から玉名郡内で焼かれた8世紀末から9世紀初頭にかけての時期のものではないかと思われる。¹

¹ 網田龍生氏のご教示による。

(参考文献)

「ムラと地域社会の変貌－弥生から古墳へ－」第37回埋蔵文化財研究集会資料、1995年

原田範昭「熊本」『弥生時代の集落－中・後期を中心として－』

第45回埋蔵文化財研究集会資料、1999年

金関恕・佐原真編「弥生文化の研究 第7巻弥生集落」雄山閣出版株式会社、1997年

宮本長二郎「日本原始古代の住居建築」中央公論美術出版、平成8年

佐藤伸二「野部田式土器」大川清・鈴木公雄・工楽善通編『日本土器事典』

雄山閣出版株式会社、1996年

坪井清足「埋蔵文化財と考古学」平凡社、昭和61年

小野忠熙編「高地性集落跡の研究 資料篇」学生社、昭和54年

「熊本県の地名」日本歴史地名体系44、平凡社、1985年

荒尾市史編集委員会編「荒尾市史」荒尾市、平成12年

玉名市史編集委員会編「玉名市史 資料篇3 自然・民俗」玉名市、平成5年

南関町史編集委員会編「南関町史」南関町、平成9年

玉東町史編集委員会編「玉東町史」玉東町、平成7年

「玉名市歴史資料集成第12集 市制40周年記念 玉名郡衙」玉名市・秘書企画課、平成6年

山鹿市立博物館編「山鹿市立博物館調査報告書第7集 方保田東原遺跡(3)」

山鹿市教育委員会、昭和62年

西住欣一郎編「熊本県文化財調査報告第121集 うてな遺跡」熊本県教育委員会、1992年

木崎康弘編「熊本県文化財調査報告第158集 蒲生・上の原遺跡」熊本県教育委員会、1996年

ほか

報告書抄録

ふりがな	ひらしまいせき
書名	平嶋遺跡
副書名	教職員玉名住宅新築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書
巻次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告書
シリーズ番号	第204集
編著者名	後藤 貴美子
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862-8570 熊本県水前寺6丁目18番1号 TEL096-383-1111 (内線6725)
発行年月日	西暦2001年12月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひらしま 平嶋	くまもとけんたまなし 熊本県玉名市 おおあさやまだ あざひらしま 大字山田字平嶋	43206	490	32度 55分 52秒	130度 32分 35秒	1999.10.12 ～ 1999.12.01	250m ²	共同住宅

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平嶋	集落	弥生時代 平安時代	竪穴住居跡 11 溝 1 土坑 3	弥生土器、 土師器、須恵器	

圖 版

図版1 平嶋遺跡 (1)



1 平嶋遺跡遠景 (南から)



2 平嶋遺跡調査区全景 (南東から)

図版2 平嶋遺跡 (2)



1 溝遺物出土状況 (全体)



2 溝遺物出土状況 (部分)



3 溝完掘状況 (全体)



4 溝完掘状況 (部分)



5 4号竪穴住居跡遺物出土状況 (全体)



6 4号竪穴住居跡遺物出土状況 (部分)

図版3 平嶋遺跡(3)



1 2号竪穴住居跡完掘状況



2 3号竪穴住居跡完掘状況



3 4号竪穴住居跡完掘状況



4 8号竪穴住居跡完掘状況



5 8号竪穴住居跡南側ベッド部除去後状況



6 11号竪穴住居跡完掘状況

図版4 平嶋遺跡(4)



1 9号竖穴住居跡炭化物出土状況



2 2号土坑遺物出土状況(全体)



3 2号土坑遺物出土状況(部分)

図版5 平嶋遺跡出土遺物(1)



図版6 平嶋遺跡出土遺物(2)



熊本県文化財調査報告 第204集

平 嶋 遺 跡

平成13年12月28日

編集 熊 本 県 教 育 委 員 会
発行 〒862-8570熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷 シモダ印刷株式会社熊本支店
〒862-0951熊本市上水前寺2丁目16-16

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 204 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 平嶋遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL： <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日